



Title	<翻訳>Valle-Inclánの『聖なる花』（翻訳）
Author(s)	堀内, 研二
Citation	Estudios Hispánicos. 2005, 29, p. 23-72
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93886">https://hdl.handle.net/11094/93886</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## Valle-Inclán の『聖なる花』(翻訳)

堀 内 研 二

Valle-Inclánは1904年中編小説 *Flor de santidad* 『聖なる花』を上梓する。作家の故郷ガリシア地方の民衆の心の中にある神秘好みの傾向が生き生きと描かれ、幻想的題材が用いられながらも民衆の生活臭の強いリアルな生態が伝わってくる作品であるが、このモデルニスモ期の傑作をここで紹介したい。

なお、翻訳に際しては、Ramón del Valle-Inclán: *Flor de santidad*, Ediciones Cátedra, Madrid, 1993を使用した。

### 聖なる花

#### 千古の物語

詩人アントニオ・マチャードのソネット

古風でもモダンでもない 田園の知的なロマンス語で  
バリエ=イン克蘭ンによって書かれた この伝説は  
明らかにする たそがれの風の愛撫のなかで  
けして萎れることない ころの聖花

この伝説の舞台は 野につぐ野  
イエスの住まわれた聖地より  
巡礼がひとり戻ってくる ガリシアの  
険しい山地のなかの 道なき道

腰に糸巻き棒をつけ 静かに糸を紡ぐ  
アデガ その目にきらめく つつましい

信仰の青い炎 夕暮れどきに

巡礼に見た 救世主イエスさまが  
 かつてお見せになった 蒼白な顔と  
 栄光につつまれた額と 愛の苦悩を

## 第一部

### 第一章

ひとりの巡礼者が旅籠をめざして歩いていた。諸国の聖地を巡礼してまわり、奇蹟を好む悲慘な山地の人々の魂を揺さぶるのうってつけの、多くの昔話の追想に裏打ちされた陰気な物語を語り歩く巡礼者たち、彼はそうした人たちのひとりであった。貝殻で飾りたてた肩マント、右手には杖といういでたちで、髪をふり乱しうらぶれた感じのその乞食は、全キリスト教世界が天の高みにサンティアゴへの道が見えると信じた、いにしえの時代の信仰心を蘇らせるように思われた。危険と苦難に満ちたあの巡礼路を、巡礼者のサンダルが土けむりの中を敬虔にも踏みしめていた！

旅籠は街道沿いにはではなく、枯死した松の老木が数本立っているだけの空地の真ん中であつた。その山地はいつも荒涼とし静寂に包まれているが、冬のたそがれの暗雲がたちこめた空の下、その感を一層強くしていた。近隣の村で犬が吠えていた。また、この世の嵐を象徴するこだまのように、はるか遠くの海岸で砕ける波のにおい轟音が聞こえていた。旅籠は新しかった。褐色の険しい連山の間であつて、血の色をしたあの門の大扉と、降りつづく冬の雨のために消えかかっているファサードの青と黄の帯状装飾は、漠とした嫌悪感と恐怖感を抱かせた。ある夜のこと悪名高い盗賊に火を放たれた以前の虫食いだらけの旅籠は、これほど陰鬱な感じは与えなかった。

夕暮れどきで、たそがれの光が人里離れた岩だらけのその場所を行者の隠遁所のような色調に染め上げ、巡礼者の黒い姿をみごとな陰影で際立たせていた。オオカミの遠吠えに似た、連山からの凍てつく突風は、彼の汚れた黒い長髪をなさけ容赦なく揺り乱し、髭の波を一方の肩から他方の肩へと運び、風がやむと、髭は十字架と数珠の揺れている胸元に乱れ震えて落ちかかっていた。大粒の雨が落ちはじめ、街道からは埃っぽい突風が吹きつけてきた。岩山の頂では一匹の黒ヤギが啼いていた。雲が水平線上に群れ集まっていた。羊たちは牧舎に戻っていくが、そのベルの音は冬の寒さにかじかんでいる牧場の平穏をほとんどかき乱さなかった。ほの暗い緑の谷間では、殉教者聖クロディオ教会が、もの寂しげに頭を振る糸杉の老木にかこまれ建っていた。乞食は立ち止まり、両手で杖に寄りかかり、ざわめく暗い松林にかこまれたふもとの集落を眺めた。その集落まで行き着く気力も失せ、彼は疲労にかすんだ目を閉じたが、溜め息をつき一息入れ、道中をつづけた。

## 第二章

千古の苔で金色になっているケルト族の遺跡の岩陰に腰をおろし、羊飼いの少女が糸を紡いでいた。羊たちはその周囲を動きまわっていた。道端では、ピンク色の乳房を揺らしながら牛が草を食み、マスティフ種の番犬が厳格な老人のように、こどもらしく執拗にじゃれついてくる子羊に吠えたりしていた。動きまわる群れの中であって身動きせず、腰ひもで糸巻き棒を固定し、短マントのすそを肩にうち返しているその少女は、宗教伝説に出てくる羊飼いの娘のように思われた。彼女は蜜色に日焼けした額と無邪気な微笑を持っていた。眉毛は金色で細く、青いスマイルの震えている眸は、祈りのように神秘的で情熱をたたえていた。羊の群れに注意を配りながら、短マントがほとんど波打たないくらい規則正しく緩やかで慎重な手つきで亜麻の玉を紡いでいた。彼女はアデガという古風な美しい名前を持っていた。たいへん信心深かったが、それは山地の人々に特有の古めかしく陰気な信仰心であった。胴着には十字架とメダルと黒玉製の魔よけ、さらにオリーブの若芽とお祈りの紙片を入れたピロードの袋を身につけていた。巡礼者の出現に駆りたてられ、地面から立ちあがり、羊の群れを追いたてながら、少女も旅籠へ向かう道を歩き出した。それは羊飼いたちの木靴に踏みしめられたハリエニシダの中の道であった。道端にたち止まり羊の群れに祝福を与えていたあの乞食に、彼女はすぐに追いついた。羊飼いの少女と巡礼者は、キリスト教徒らしいつつましさで互いに挨拶を交わした。

「神の称えられんことを！」

「神の称えられんことを！」

男はアデガにじっと視線を注いだ。それをふたたび地面に戻すときに、もしかして旅籠で働いているのではないかと乞食たちに特有のあのひどく哀れっぽい口調で訊いた。彼女はくどいほど冗漫にだが顔は上げずに、自分が家畜番で、食べ物と着る物をあてがわれそこで奉公していると答えた。数えていたわけではないが聖ヨハネ祭の月でまる三年になると思っていた。その下婢の声は単調だが響きがよかった。ほとんど西ゴート族の言葉に近い、山地の古風なロマンス語で話していた。巡礼者は遠い土地からやってきたようだった。しばらく間をおいてから、彼はふたたび尋ねた。

「なあ、あんた、宿の主人たちが情け深い心の持ち主か知りたいんだが、ガリシアのサンティアゴに巡礼にやってきた哀れな罪びとに、一夜の宿を恵んでくれるだろうか」

アデガは返事をする勇気がなく、短マントのすそを指先でよじっていた。やがて群れに一声かけると、視線を上げ小さな声でこう言った。

「ええ！……情け深いわ、その通りよ！……」

彼女は牛を急き立てるためにわざと口をつぐんだ。牛は道の真ん中で横向きになり、新芽を求めハリエニシダ越しにくびきを伸ばしていた。その後ふたりは無言のまま旅籠の門のところまで歩きつづけた。少女が家畜を小屋に入れ、かいは桶に湿っ

た馨しい飼料を用意しているあいだ、巡礼者は旅籠の門前で主の祈りを唱えていた。アデガは牛小屋に出入りする度ごとに彼を見ようと足を止めた。巡礼者の粗布のぼろ服は、彼女の心にキリスト教徒らしい感情を炎のように燃え上がらせていた。金色の眉毛と無垢な胸をしたその羊飼いの少女は、できるものなら喜んでその旅人の埃まみれの足を洗い、また、髪を梳き拭いてさしあげたことだろう。しかし、素朴な信仰に包まれた彼女は、敬虔なつつしみから全身ががんじがらめになったような感じがしていた。その土地の深い寂寥、おぼろ月の浮かんだ西空の幻想的な輝き、贖罪のために苦行する巡礼者の乱れ髪黒い姿、これらが彼女の心に、教会の安らかさの中で聖像たち一壁龕の金色の神秘性の中、燈明の震える光に照らされ遠くかすかに見える、輪郭も顔も判然としない厳かで靈驗あらたかな彫像—の列座する祭壇彫刻を前にして、思わぬときに経験するあの畏敬の念を吹き込んだのだった。

### 第三章

アデガは孤児であった。彼女の両親はあの不幸な飢饉の年、苦痛と高熱にさいなまれ死んだ。それはかつては陽気で腕白であったシル川とミーニョ川の水車が、永遠に口を閉ざしてしまっただけのように思われた年であった。羊飼いの少女は、病熱にとられ藁に横たわるふたつの蒼白い亡霊の断末魔の苦しみを、愛と恐怖にうち震えながら思い出し、今なお幾夜となく祈りを捧げていた。夜更けの静寂がこの種の追想に添えるぞっとするような浮き彫りにより、彼女は悪寒に震える両親の哀れな体をふたたび目のあたりにし、どこまでも自分を追ってくる母親の眼差しにまた出会い、苦悶にゆがんだ父親の痩せこけた顔—墓穴をゆっくりと掘っている病魔の音を立てない嘲弄的な笑顔—を暗がりの中で押し量ったものであった……

なんとひどい冬であったことか、あれは！教会の境内は新しい墓で蔽われた。飢えたオオカミが毎夜村に下りてきて、絶望的な遠吠えをあげるのが聞こえた。夜が明けても、早起きの歌声が裏庭の静穏をかき乱すこともなく、太陽が寒さにかじかむ野を暖めることもなかった。毎日は霧雨の灰色の経帷子にくるまれ、単調に過ぎていった。風は激しく冷たく、愛撫することもなければ芳香を運ぶこともなく、それは野草をしなびさせる呪いの息吹であった。ときおり日暮れどきになると、松林に身を隠した風が、あの世の声で嘆くのが聞こえた。牧舎は空になり、竈には火はなかった。煙突の中では小鬼が退屈のあまり死んだ。屋根瓦のすき間からは、意地の悪い執拗な雨が、湿気の充満した小屋にしみ込んでいた。ずぶ濡れで、寒さにかじかみ、からだを震わす、腹をすかした、肺病やみの魔女が竈口にしゃがみこみ、夜を徹していた。魔女は咳をたてながら、暗くて寒い煤けた片隅の死せるこだまを呼んでいた……

なんとひどい冬であったことか、あれは！山間の集落からオオカミのように下りてきた腹をすかせた山人たちの群れが、くる日もくる日も街道に列をなしていた。彼らが夕暮れに村を通りぬけるとき、その木靴は陰鬱な音をたてていた。彼らは道

に迷った羊の群れのように、立ち止まることなく黙々と通りすぎた。その村もまた飢えていることを知っていたからであった。彼らは疲れきり、ゆっくりとした足どりで、ばらばらの列をなして街道を進んだ。ただ谷間にひっそりと身を隠したどこかの教会の老鐘がその聞きなれた音色を響かせるときにのみ立ち止まった。それはぶどう畑やとうもろこし畑がどうか助かりますようにと唱える、神父たちのあの祈祷の時を告げる鐘であった。そのときは道に沿ってひざまずき、涙声でお祈りを唱えた。そのあとで、遠くの町々、今なお城壁の門を保存している封建時代の古い町々をめざして物乞いの旅をつづけていった。先頭の人たちは朝が雪で白く蔽われている頃に現れ、しんがりは夕暮れが吹雪の衣に身をくるみ逃げ去っていく頃に着いた。次から次へと到着するごとに、彼らは旧家の表門の前にすわりこみ待っていた。入り口につながれた細身の獵犬が、吠えたてながら彼らを出迎えていた。あの白い長髪の老人たち、あの日焼けした若者たち、腕にこどもを抱いたあの女たち、垂れさがり揺れる大きな甲状腺腫をもつ腰のまがったあの老婆たち、彼らはつつましく賛美歌をうたって施し物を求めていた。彼らはパンに口づけ、とうもろこしに口づけ、乾し肉に口づけ、これらすべてを恵んでくれる手に口づけ、そのあとで、地上にいつも慈悲の心がありますようにと祈った。彼らは聖ヤコブと聖母マリアに祈った。

なんとひどい冬であったことか、あれは！アデガは孤児になると、みんなと同じように町の中や街道で物乞いをしていたが、ある日旅籠に引き取られることになった。だがその情けはあまり大きなものではなかった。なぜなら彼女はまだ十二歳だということにかなり重い牧草の束を背負ったり、羊たちを連れ山に行ったり、水車小屋に穀物を運んだりしていたから。旅籠の主人たちは彼女をわが娘としてではなく奴隷として扱った。夫婦は横暴で、口汚く、残酷であった。アデガはその虐待に決して反抗しなかった。集落の女たちは彼女が鳩のようにおとなしく、大地のようにつつましいと思った。少女が荷を背負い、はだしで雨のしずくを滴らせながら町から戻ってくるのを見ると、しばしば彼女を不憫に思い、「かわいそうにねえ、親がいなくて！……」と言って、大きな声で祈ったものであった。

#### 第四章

乞食は旅籠の門前であいさつの口上をのべた。

「お情け深い方々、この哀れな巡礼にどうかお恵みを！」

彼の声は重々しいが哀れっぽかった。杖に額をもたせかけると、埃まみれの陰気な黒い長髪が顔にかかった。老婆が戸口から顔を出して言った。

「さっさと行っておしまい！」

腰ひもに糸巻き棒をとりつけ、そのミイラのような指で錘を回していた。巡礼者は予言者のような眉間にしわの寄った強情そうな顔を上げて言った。

「それで、どこへ行けて言うんで？ 山道に迷って」

「神さまのお導きになるところさ」

「オオカミに喰われにかね」

「まさか！……オオカミなんていないよ」

こう言って老婆は亜麻の玉を紡ぎながら、ふたたび家の中に入ってしまった。突風が吹いて扉を閉めた。巡礼者はぶつぶつ言いながらその場から離れた。杖の先で石を叩いていた。急にうしろを振りかえり、土を一つかみ取ると旅籠めがけて投げつけた。小道の真ん中に立ち、陰にこもった激しい呪いの声でこう叫んだ。

「神よ、どうかペストでこの薄情な家を永久に閉ざしたまえ！どうかこの戸口にイラクサをびっしりと生やしたまえ！窓辺を日向ぼっこのトカゲだらけにしたまえ！……」

巡礼者の肩マントでは、十字架とメダルとイェルサレムの数珠が揺れていた。彼の言葉は風の中でもの悲しく響き、つやのない弛んだ乱れ髪が両の頬を叩いていた。アデガが羊の囲い場の柵のところから小さな声で彼を呼んだ。

「ねえ、ちょっと！……」

巡礼者が気がつかなかったので、彼女はおずおずと近寄っていった。

「あの、牛小屋に泊まったら？」

巡礼者は硬い表情で彼女を見た。アデガはますますびくつき、恥ずかしがり、朱色をおびた指先に馨しいスゲの葉を巻きつけながら言った。

「夜中に山に入ったらいけないよ。ほら、牛小屋の中は干し草でいっぱいだから、心地よく休めるわ」

彼女はやさしく懇願するように、そのスマイルの眸を上げた。震える唇は切望のあまり半ば開いていた。乞食は一言も答えずに微笑んだ。そのあとで振り返り旅籠のほうを窺ったが、扉は閉まったままだった。そこで彼はオオカミの足どりで牧舎に逃げこんだ。アデガは彼につづいた。聖人物語にみられるように、マスティフ種の番犬が静かに近づいて行って、巡礼者と少女の手を嘗めた。牧舎の中は暗くほとんど見えなかった。空気は生暖かく、田舎の匂いがし、牛の息づかいが聞こえていた。野放しの子羊が、くびきで繋がれた二頭の牛の脚のあいだでじゃれて駆けまわり、鼻面で乳房を押ししたり、腕白そうな顔をあげ啼いたりしていた。マレーラとベルメーリャは老尼僧院長のようにいかめしい態度で、かいば桶の上で頭をふりふり新鮮で馨しいクローバーを反芻していた。牧舎の奥には干し草の山があり、アデガは巡礼者の手を取ってそこに導いた。ふたりは手探りをしながら歩いていった。巡礼者は干し草の上に身を投げだし、アデガの手を離さずに声をひそめて言った。

「あと残っていることといたら宿の主人たちが来ることだけだな！……」

「そんなこと決してないわ」

「あんたが家畜の世話をしてるのかい？」

「うん」

「牛小屋で寝てるのかい？」

「うん」

乞食が腰に手をまわすと、アデガは干し草の上に倒れた。逃げようというそぶりは少しもみせなかった。アデガは自分を情愛深く抱きしめるその聖者のそばにいられることに、身を震わせながら感謝していた。彼女は溜め息をつき、その無垢な胸を覆い隠すように、そして祈りを捧げるように、胸の上で両手を交差させた。番犬がやってきて彼女の膝に頭をのせた。アデガは消え入るような敬虔な声で巡礼者に尋ねた。

「もうずいぶんとあちこち歩きまわってきてるの？」

「あのイエルサレムからだ」

「ここからはすごく、すごく遠いんでしょう？」

「百レグアよりもっとあるよ！」

「うわあ、すごい！……それで、ぜんぶ山道なの？」

「ぜんぶ山道さ、それもひどい道でね」

「すごい！天国ゆきはもう确实だわね」

巡礼者の数珠が髪にからみついたので、アデガはそれを何とか外そうとひざまずいた。両手が震え、狼狽しながらどうにか数珠を外した。少女は敬虔の念にとらわれ、指からあふれんばかりの十字架とメダルに口づけた。

「あの、この数珠も主のお墓に触れてきたの？」

「主イエスさまの墓にね……それだけじゃあなく、十二使徒の墓にもだよ！」

アデガはふたたびそれらに口づけた。すると、巡礼者は教皇のような手つきで数珠をひとつ少女の首にかけた。

「ここに入れておくがいい」

こう言って、羊飼いの少女が胸の上でしっかりと交差していた両腕をやさしくひき離した。少女は切なそうな声で言った。

「やめて！……お願い、やめて！」

乞食は笑みを浮かべ、胴着のボタンを外そうとした。彼の毛深い手の上で、少女の手が豆鉄砲を食らった二羽の鳩のように飛びまわっていた。

「やめて、自分で入れるから！」

巡礼者は彼女を脅した。

「それじゃあ、取り上げてしまうぞ」

「ああ、お願い、そんなことしないで！……ここに入れてください、どこでも好きなのところに……」

こう言ってアデガは胴着のボタンを外し、首を切られようとする処女の殉教者のように白い胸もとをあらわにした。

## 第五章

アデガは羊たちを連れ山に出かけると、大きな岩の陰に寝そべり、こうして雲をじっと眺め、子供のようにうっとりとして何時間も過ごしたものであった。無邪気

な信仰心をもつ彼女は、蒼穹が大きく口を開き、自分に天上の栄光をかいま見せてくれることを待ち望んでいた。時のたつのも忘れ、この夢想の霧のなかに迷いこみ、彼女は奇蹟の燃えるような息吹きが自分の顔にかかるのを感じていた。そしてついに奇蹟が起こった！……ある夏の夕暮れどき、アデガは顔色を変え、息を切らして旅籠に帰ってきた。彼女の眸の青みがかった花の中で妖しい炎が震えていた。憂いをたたえた少女の口は微笑でなかば開き、その顔には神秘的な喜びが聖油のようにばらまかれていた。彼女は言い表すうまい言葉が見つからなかった。びっくりした鳩のように心臓が胸の中で高鳴っていた。雲がひき裂かれ、天国が彼女の目の前に現れたのだった、やがては大地に食われてしまうことになる賤しい目の前に！彼女は地面にひれ伏し、唇を震わせ、興奮して話していた。その両の頬には涙が流れていた。かくも賤しい彼女が、かくもとてつもなく大きな神の寵愛を受けたのだ！恩寵の波に感情を高ぶらせ、激しい、音をたてる口づけで、夫に口づけする恋する妻のように大地に口づけていた。

羊飼いの少女の幻視は人々の心を驚嘆させ、それはその地における教化的な出来事であった。ただはるか遠い土地を巡り歩いてきていた旅籠の息子だけは、あえてその奇蹟を否定した。村の女たちは彼に見せしめの罰が下されるだろうと予言していた。アデガはますます寡黙になり、果てしない夢想の中で生きているように思われた。彼女に祈祷師の気配を感じる者も多くいた。牧場に草刈りに行ったり、穀物をついで水車小屋に出かける彼女を遠くから目にとめると、畑を耕していた人たちは仕事の手を休め、彼女を出迎えようと沿道までゆっくりとやってきた。少女に向けられる質問は千古の無邪気さを含んだものであった。村人たちは信仰で顔を輝かせ、敬虔なささやき声で、彼女に自分たちの故人の消息を話してくれるよう求めた。もし天国で至福を享受しているのなら、羊飼いの少女の幻視にその姿を現わしたのではないか、結局のところ彼女は同じ教区の信者なのだから、と彼らは思ったのであった。アデガは恥ずかしそうに目を伏せていた。彼女はただ主イエス・キリストを、あの雪白なる厳かな髭と温和なことこの上ない眼差しと光に包まれた額を見ただけであった。羊飼いの少女の言葉を聞いて、女たちは十字を切り、白髪の老人たちは愛情をこめ彼女を祝福した。

さらに時が経ち、少女はふたたび新たなる幻視を体験した。最初のとき彼女の目を眩ませたあの炎のような雲の背後に、今度ははっきりと天国が見えたので、聖者たちの顔さえ識別することができた。その数はおびただしかった。長い髭をした総大司教たち、恍惚の笑みを浮かべた聖女たち、額の禿げ上がった博士たち、輝かしい顔の殉教者たち、修道士たち、高位聖職者たち、聴罪司祭たち。彼らは王冠のように宝石のちりばめられた銀細工の礼拝堂を住まいとしていた。来世の光り輝く靄につつまれ、行列が次から次へと続いていた。それらの行列は真紅の旗と光り輝く十字架の中を、小太鼓とバグパイプに先導され、神の玉座の御前で熾天使たちが日夜めぐり落とす、あの典礼式用のバラの花びらの敷きつめられた馨しい小道を進ん

でいった。突然何千何万という鐘が、田舎の洗礼式のような賑やかな音をたて鳴りだした。雄鶏が鳴き家畜小屋の羊が啼く時刻である、夜明けを告げる鐘の音であった。象牙の輿の上からは、聖女バヤ・デ・クリスタミルデ、聖ベリシモ・デ・セルティゴス、聖シドラン、聖女ミア、聖クロディオ、聖エレクトゥスが、羊飼いの少女のほうに艶やかなバラ色の笑顔を向けていた。彼ら、山地の聖堂や教会の古い昔からの守護聖人たちもまた、自分たちの下婢の顔を認めたのだった！連祷と賛美歌と射祷の、厳粛で神秘的で荘重なささやきが聞こえていた。それは断末魔のような激しい祈りで、その上を聖ペテロの鍵のぶつかり合う金色の音が飛び交っていた。花咲く小枝を杖がわりにした羊飼いの若者たちが、アイリスの野で無垢で雪白の毛をした羊たちの番をしていた。羊たちは靈験あらたかな泉にかけつけ、雑然とした祈りにも似た音をたてる湧水を飲んでいて。若者たちは銀のフルートやファイフを心地よさそうに吹き鳴らしていた。羊飼いの娘たちは金の鈴のついたタンバリンを叩きながら、笛の音に合わせて踊っていた。その青い地域にはオオカミはいなく、そこで草を食んでいる羊たちは御子イエスの群れであった！……そして、来世との境界をなす幻想的な頂をした連山の背後では、太陽と月と星が永劫につづいたそがれの中に沈んでいる。煉獄の靈魂たちの白く長い列が、何世紀も何世紀もそのまわりを回っている。主が彼らに目をお向けになると、彼らは浄化され、鮮やかな光塵でできた神秘的な橋をわたり、喜悅し、意気揚々と天国に昇っていく。

主イエス・キリストが羊飼いの少女にその恩寵の証しをお示しになったあと、彼女は自分の魂が強固になり神にゆだねられたと感じた。彼女は一生懸命に働き、やさしく牛の首をかき抱き、ぼろ服にくるんだ体を恐怖で震わせながら、伏目がちに主人たちの言いつけすべてに従っていた。

## 第二部

### 第一章

夜明けとともに目覚めたアデガは、空の白さが牛小屋の開いた戸口を包んでいると思った。その戸口の外には霜で水晶色にみえる湿った牧場が広がっていた。巡礼者の姿はもうなかった。ただ干し草の山に彼の体の聖なるくぼみが残っているだけであった。アデガは溜め息をつきながら起きあがり、番犬が寝そべっている戸口に行った。夜明けの淡い空では、まだ消えかけの星がいくつか瞬いていた。村の雄鶏が鳴き、街道をやぎの群れが馬に乗ったふたりの牧童に導かれ進んでいた。音もなく静かに雨が降っていた。遠くの山々、アメジスト色の山々では雪が白く光っていた。アデガは巡礼者を見ようと、涙でいっぱい目をぬぐった。彼は家畜の群れや羊飼いたちの木靴に踏みしめられた山道の、黄色っぽく白茶けた坂を登っているとところだった。尻尾を巻いた一匹の雌ギツネが菜園の鉄柵を飛び越え、走って道を横切った。村から逃げてきたところであった。番犬が耳をぴんと立て、突然吠えはじめた。その後で鼻先でにおいを嗅ぎながら駆けだした。巡礼者の姿はもう見えなかつ

た。囲い場から旅籠のおかみの呼ぶ声がした。

「アデガ！……アデガ！……」

アデガは首にかけて数珠に口づけし、胴着のボタンをはめた。

「何ですか、おかみさん？」

おかみは魔女のような頭を柵越しに出して言った。

「羊を出して山に連れておゆき」

「わかりました」

「途中で水車小屋に寄って、ライ麦の臼が動いてるか訊いてきておくれ」

「わかりました」

アデガは囲い場の戸を開け、杖をとりに中に入った。羊たちが一匹ずつ外に出てきた。おかみは小声でその数をかぞえていた。最後の羊が出口のところで倒れて死んだ。その年生まれの白い羊で、毛はまだ一度も刈られてなく、神の子羊のように真っ白い無垢な毛をしていた。羊が死んだのを見て、旅籠のおかみが嘆き叫んだ。

「ああ！……家畜に呪いがかけられたんだ……聖クロディオさま、どうかお助けを！」

この哀訴に羊たちが悲しげな啼き声で伴奏をつけていた。アデガもこう言って応じた。

「あの巡礼の呪いですよ、おかみさん。あの聖者は主イエスさまだったんです。いつかわかるわ！主イエスさまで、どこに慈悲の心があるか確かめるために物乞いをしてまわっていたんです」

羊たちはやさしいまなざしで少女のまわりに集まっていった。彼女の目には至福の炎、星々の無垢な輝きがみられた。また、その声には聖性が塗布されていた。彼女は予言するように歌った。

「いつかわかるわ！いつかわかるわ！」

彼女は祈禱の術をそなえた幻視者のようであった。朝日が長い聖なる一日のはじまりであるかのように、彼女の頭上にのぼっていた。連山の雪を冠した峰では、暁のバラ色の霧が天使の光背のように震えていた。夜明けの金色と赤紫色の大外衣をまとった野が目覚めていた。大男聖クリストバルの厳かな肩から放たれた大外衣……緑の牧場の芳香が、はるか遠い昔の幸せな田園生活を讃えるかのようにあたりにばらまかれていた。牧場の奥では、淀みとなって溜まった水が野花を銀色に彩っていた。東方の三博士の伝説や敬虔な王女の理想の愛を知る天上の紋章図鑑のバラやユリ。遠くの青い霧の中に、聖堂をとり巻く殉教者聖クロディオ教会の糸杉が、その夢想にふける黒い姿をくっきりと浮かびあがらせていた。天使の降臨のごときその夜明けの中で、そのもの憂げな樹冠は金色の琥珀の光を浴びていた。旅籠のおかみは額の上で干からびた両手を組み、涙をうかべて死んだ羊、百匹のなかでいちばん気に入っていた白い羊を見つめていた。ゆっくりとアデガのほうをふり向き、力のない声で言った。

「でもお前、確かかい？あの旅人はひとりだったよ、あたしがこれまでに聞いた話

では、主イエスさまが各地をお歩きになったときには、いつもお伴に聖ペテロさまをお連れだったってことだけだ」

アデガは無邪気な敬虔さで答えた。

「連れていかなかったんですよ、おかみさん。聖ペテロさまはひどく年寄りだから、きっと道端に腰をおろして休んでいたんですよ」

おかみは納得し、そのミイラのような両腕をあげて言った。

「聖クロディオさま、どうかあたしの羊たちをお守りください、そうして下さったら祭日にいちばんいい羊をさし上げますから！いちばんいい羊ですよ、聖クロディオさま、見るだけでうれしくなるような！いちばんいい羊ですよ、聖者さま、天国でもみんなが羨ましがらるような！」

それからおかみは狂女のように溜め息をつき、祈りを唱えながら群れの中を歩き、小声で天国の聖者たちと話をしたり、羊たちの首をなでたり、不安に震える節くれ立った農婦の指でその額にまじないの印を描いたりしていた。羊が一匹逃げだしたので、アデガは捕まえようと後を追いかけていった。息を切らして空地じゅうを追いかけてまわした。アデガは羊の毛に両手をからませ、露にぬれた野草の上に倒れこんだ。おかみは群れの中で身動きせずに、遠くから魔女のようなまなざしを彼女に向けていた。

「起きあがるんだ、アデガ！……羊を逃がすんじゃないよ……頭にソロモン王の円を描くんだ、呪いを破ってくれるから……左手でだよ！……」

「わかりました、おかみさん！」

アデガは言われた通りにし、そのあとで羊を放した。羊は彼女のそばにとどまり草を食べていた……

## 第二章

旅籠のおかみと羊飼いの少女は、羊の群れを追いたてながら山を下っていく。ふたりの女は巡礼に出かけるように、折りたたんだ前掛けを頭にのせ、連れだって歩く。朝の光が野を金色にかがやかせ、露をしたたらず緑の生垣の香る道は、羊たちのベルの音の下で目を覚ます。羊たちは押し合いへし合いして進んでいく。道は種まき期やおどろの収穫期の古道のように、じめじめし曲がりくねった田舎道である。野草は羊たちのひづめの下で折れ曲がり、群れが通りすぎるとゆっくりとふたたび頭をもたげ、あたりに新鮮な朝露の清らかな香りをばらまく……緑の牧場の奥を、そばかすだらけの娘が赤毛の牛の端綱をひいて横切る。町へ出かけるところである。町へは毎日夜明け前に出かけ、家々の戸口の前でしぼりたての乳を売っている。老婆は道端に寄り、大声で呼びかける。

「おい、あんた！……セラの娘さんよ！……」

娘は牛の端綱をひき、立ち止まる。

「何か用？」

「ちょっと話があるんだよ……」

遠く離れていたで、ふたりは山地の歌にみられるあのゆっくりと伸ばす口調で、声を張りあげ話していた。老婆は数歩下って行ってから大声でこう言う。

「まさかあんに途中で会えるとは思わなかったよ！ちょうどあんのじいさんのところに行くところなんだ……あんな、テシェラン・デ・セラの孫娘だろう？」

「うん、そうだよ」

「そうだと思った、でも目がよく見えなくなっているもんでね」

「あたしってことは、この牛を見れば遠くからでもわかるよ」

「いい牛だねえ、おてんとさまみたいにピッカピカだ。聖クロディオさまのご加護がありますように！」

「アーメン！」

「じいさんはセラにいるかい？」

「水車小屋にいるよ、かあちゃんと一緒だ」

「明日はブランデソの市の日だから、どうかなって思っていたんだ。出かけてしまっても不思議はないからね」

「外に出かける力があればいいんだけど」

「病気なのかい？」

「すっかり体が弱くなってしまって。あの年だし、それにずっと働きづめだったし」

「気の毒に！」

「織ってもらう亜麻糸があったら、エレクトゥスおじさんところにもっていくといいよ」

「亜麻はある。一ダース以上糸かせにとつてあるよ！でも、今あんのじいさんとこに行くのはその用じゃなく、家畜の病気が治せるか訊きに行くんだ」

「そこまではあたしにはわかんない。病気はなんでも、それがふつうのでも呪いによるものでも以前は治してたけど、今はもう前みたいには治したがない。新任の司祭さまがある日の午後あたしんちにやってきて、おじいさんを破門しようとしたんだ。でも、会いにいったらいいよ」

「治してくれたら存分に報いるつもりだがね」

「あたしには何とも言えない……でもわざわざ出かけてきたんだから……」

それから娘は一声発し、牛を急きたてる。そのあとで老婆のほうを振りかえり言う。

「じゃ、元気でね！」

「あんなも達者でな！」

老婆は歩きつづける。彼女の陰気で無愛想な目は、前に行く羊の群れを眺めている。遠くの道をたくましい男たちの一団が、長い追いたて棒を手にし、たてがみのもつれた毛質のあらい小馬にまたがり、大声を発しながらブランデソの市に向かって進んでいる。牛追いやばくろうたちである。胸に端綱と手綱をはずかいに掛け、

つば広の帽子をかぶり、あごひも代わりに赤いスカーフを用いている。彼らは小馬に拍車をかけ、だく足で走らせ、拍車と轡のにぎやかな音のなかをひしめき合って進んでいく。セラとサン・クロディオの地の農夫たちも、威厳をもってのっそりと歩く二頭立ての牛を導いている。派手な服装の日焼けした女たちが、にわとりやヤギやライ麦を市へと運んでいる。

川岸のねじれ曲がったヤナギの緑の葉陰で、村人たちが草の上に腰をおろして渡し舟を待っている。旅籠のおかみは人垣のなかにすわる場所を探し、アデガはすこし離れたところで群れの番をしている。長いマントをひきずり、先の尖った茶色のずきんをかぶった抜け目のない物乞いの盲人が、自分のまわりにすわっている娘たちに面白い話を語って聞かせている。この饒舌な老人は修道士のようないかめしい横顔をしているが、茶色のずきんの尖った先端と口を開いた大きなスイカに似たひげを剃ったその田舎者らしい口は、彼の物言いよりもずっと悪意をたたえている。彼の物言いはぶどう酒と牛飼娘と詩作の好きだった昔の陽気な主席司祭たちにそっくりであった。村娘たちは歓声をあげ、盲人はニンフにかこまれた老牧神のように微笑んでいる。旅籠のおかみの足音を聞くと彼は漠然と尋ねる。

「誰だい？」

おかみは振りむいてそっけなく言う。

「ぴちぴちの娘だよ」

盲人は抜け目なく笑う。

「司祭さまにぴったしのな」

「違うよ、あんたと寝るのにだよ。司祭さまはもうすっかりガタがきているからね」

盲人は注意を凝らして誰の声か聞き分けようとする。旅籠のおかみは彼のかたわらの草の上にへたりこんで、苦しそうに溜め息をつく。

「ああ！まったくひどい道だよ！」

村人のひとりが尋ねる。

「ブランデソの市に行くんかね？」

「いや、もっと近くだよ……」

別の村人が嘆いて言う。

「今年の市が去年のようだと困るぞ！……」

ある老婆がつぶやく。

「あたしゃあんとき牛を売ったよ」

「俺も売った、でも損してしまった……」

「すごくかね？」

「まるい金貨一枚だよ」

「それは大金じゃないか、あんた！」

別の村人が言う。

「あんときは天気が悪かった。でも今年は恵みの天気だから」

数人が口々に言う。

「そうだ！……その通りだ！……」

長い沈黙がみられた。盲人は旅籠のおかみのほうに触れようとして腕をのばし、ふたたび尋ねる。

「誰だい、あんたは？」

「さっきぴちぴちの娘だって言っただろうに」

「だから俺は司祭んどこへ行けて言っただろう」

「まずは休ましておくれ」

「そんなこと言ったらと正体がバレるじゃないか」

村人たちはふたたび歓声をあげる。盲人は開いた目で見据えたまま、陽気な農耕の祖神のように、崇拜のこだまのごとき笑い声を堪能しながらも、抜け目なくあたりに注意を配っている。

### 第三章

ほの暗い谷間ののどけさの中で、ふたりの若者が腰をかがめて馨しい湿ったクローバーを刈っている。緑の草のあいだで鎌が奇妙な凶暴性をおびて光っている。灰色の毛と長い耳をした年老いたロバが、端綱を引きずりながらおごそかに草を食んでいる。また、羊毛のようにふさふさしたたてがみと落ち着きのないからかうような耳をしたもう一頭のこどものロバは、頭をもたげ腕白そうな陽気な目で小道のほうを眺め、善良な王に仕える道化役といった様子で頭を動かしている。ふたりの女が通りがけると、若者のひとりが道に向かって大声で言う。

「ブランデソの市に行くんかい？」

「もっと近くだよ」

「いい羊だねえ！」

「前はね！……今は呪いをかけられているんだ。それでセラの水車小屋に行くんだよ！……」

「祈祷師のところに行くんだね？……俺の主人は牛を治してもらった！どんな呪いでも解く祈祷を知っているんだ」

「そうだといいんだが！」

「気をつけて行きなさいよ！」

ふたりの女は道中をつづける。彼女たちは生垣の陰を求め、獯猛な犬たちが顔をのぞかせ頭をあげ歯を剥いて吠えたてても相手にしない。羊たちは道いっぱいになり、怖がり、古い牧歌に出てくるようにやさしい啼き声をたてながら進んでいく。雀があたりを飛びまわり、月桂樹の生垣に群れをなして止まり、くちばしでまだ葉に残っている雨のしずくをばらまいている。川の曲がり角の古銀でできているようなポプラの枝の下で、水車小屋が微笑んでいる。川の水は堰をとび越え、老衰し疲れきった水車は、小麦と豊穡の古い聖歌をうたっている。その老いぼれた田園詩風

の歌声は庭でも道でも聞こえる。粉ひきの女房が高いテラスで、とうもろこしをいっぱい入れたスカートを腰までたくし上げ、穀粒をもいでいる。粒をもぎながらテラスから大声で呼びかける。

「そーら！……そーら！……」

こう言って彼女は空中にとうもろこしの粒を一握り投げる。穀粒は夏の驟雨のような音をたて枯葉の上に落ちかかる。雌鶏たちがすばやく駆けつけ、土をついばむ。雄鶏は鳴き声をあげる。ふたりの女は水車小屋の門扉のところから挨拶をする。

「こんにちは、いい日和で！」

粉ひきの女房はテラスから挨拶を返す。

「本当にいい日和で！」

挨拶のあとゆっくりとした歌うような問答がつづく。旅籠のおかみは日差しを避けようと目の上に手をかざして話す。

「収穫は多いのかね？」

「神のお恵みがそうであってくればいいんですけど！」

「石臼はいくつ動いてるんだい？」

「三つとも。小麦のと、とうもろこしのと、ライ麦のとね」

「堰には水がたっぷりあるようだねえ！」

「今んところは不足してないですよ！」

「この土地には飢饉は泳いでやってくるって、じいさまたちは言ってたけどねえ！」

粉ひきの女房が下りてきて門扉を開けるが、旅籠のおかみとアデガは羊たちが一匹ずつ中に入りおわるまで道にとどまっている。そのあと、羊の群れが庭いっぱいになると溜め息をつきながら入ってくる。粉ひきの女房は農婦らしい節くれ立った指で子羊の毛に触れてまわる。

「すばらしい羊ですねえ！」

「前はそうだったんだが！」

「ひょっとして呪いをかけられたんでは？」

「毎日一匹ずつ死んでいくんだよ！」

「それじゃあ、おじいさんを探してるんですね？……そのあたりにいたけど……おじいさん！おじいさん！」

三人の女は戸口のぶどう棚の下で待つ。雄鶏がテラスに上がって鳴いている。雌鶏たちはまだ草の上でついばんでいる。粉ひきの女房はスカートに残っていたとうもろこしの最後の穀粒を投げ与える。果樹園の奥のリンゴの木陰に老翁が現れる。博士然としたにこやかな老人で、長い白髪に光沢のある深いしわ、古い祭壇画の聖人たちのような趣がある。彼は宗教儀式の行列のようにゆっくりと牛とロバを導いている。家畜の目には田舎の夕暮れどきの物寂しさが漂っている。彼らの背後から一匹の犬がついてくる。犬はいぶかるように羊の群れに近づき、そのまわりを耳を下げ尻尾を垂らして歩きまわる。老人は立ち止まり、予言者のように両腕をあげて

穏やかに言う。

「わしにははっきりとわかるぞ、あんたの家畜に呪いがかけられてるのが！……」

旅籠のおかみは悲しそうにつぶやく。

「ああ！……それだからやってきたんだよ！」

老人はうなだれる。羊たちは彼をとり囲んで啼き、彼は聖者のような穏やかな手つきで撫でてやる。そのあとで深刻そうにつぶやく。

「お役には立てぬ！……お役には立てぬ！……」

旅籠のおかみはがっかりし溜め息をつく。

「呪いを解く祈祷を知ってないのかい？」

「祈祷は知ってる。だが、おこなうことができるのじゃよ。司祭さまがここに来て、破門するって脅したからな。おこなうことができるのじゃよ！……」

「それじゃ羊たちが一匹ずつ死んでいくのを黙って見ていなければならなくなる！……あたしのすばらしい羊たちが！……」

「本当にみごとな羊じゃ！あのおちのは、まだこどもかな？」

「そう、まだ子羊だよ！」

「で、二匹の乳呑み子を連れてた白いのは、まだ若そうだが？」

「そう、まだ二年たたないよ！」

老人はふたたび繰り返した。

「本当にみごとな羊じゃ！すばらしい羊たちじゃ！」

すると旅籠のおかみは悲しそうな顔をし、諦めたようにアデガのほうに振り返った。

「お前、ぶちを掴まえておいで……」

アデガは犬を脅しつけてから走りだし、黒い斑点のある白い子羊を抱えてきた。子羊は耳を動かし啼いていた。アデガがおかみに近づいたとき、貪欲さが震えている女主人の銅色の目のなかに、老人に羊をさし上げなさいという苦悶の叫びのごとき命令を見てとった。祈祷師は微笑みながら子羊を受け取った。

「ありがとうよ！」

「どういたしまして！」

旅籠のおかみはずきんを直してから田舎女の意地の悪さを見せてこう言った。

「子羊はあんたにさし上げる……でも、あたしの羊たちみたいに死なないようにそれに祈祷をおこなわなければならないよ！」

祈祷師は微笑み、老人特有の震える手で子羊の毛を撫でながら言った。

「司祭さまに気づかれぬよう祈祷をおこなうことにしよう」

こう言ってからぶどう棚の下に腰をおろし、ずきんを取り、子羊を腕に抱え、族長の時代の老人のように温和で幸せそうな表情で、羊の群れに長々とした祝福の言葉を垂れた。羊たちは太陽が金色に染めている荒れた静かな庭の真ん中に集まっていた。

「いいかね、家畜にかけられる呪いは三つある！……ひとつは草に、ひとつは水に、もうひとつは空気にじゃ……あんたのこの羊たちは水の呪いをかけられている！」

旅籠のおかみは両手を合わせ、宗教的な感興に目をうるませ、祈祷師の言葉を聞いていた。彼女は自分の顔に奇蹟の息吹きがあたるのを感じていた。ぶどう蔓を貫く太陽の光が、老人の銀白色の頭に金色の光輪をつけていた。彼は両腕をあげ子羊を放したが、子羊は膝のうえから離れなかった。

「水の呪いは満月の夜の十二時にのみ破ることができる。それには道の四つ辻のところで、櫛の木が一本生えている泉の水を飲ませに、家畜を連れていくことが必要じゃ……」

祈祷師が話をやめると、子羊は彼の膝から飛びだした。信仰に顔を輝かせた旅籠のおかみが、道の四つ辻で櫛の木が生えているような泉がどこにあるか思い出そうと考えこんでいると、祈祷師が言った。

「あんたの探している泉は聖グンディアン教会の近くにある、旧街道を行ったところの……何年か前にはほかにもふたつあった。ひとつはブランデソの共有農場に、もうひとつはセラ教会の境内に。だがある魔女によって櫛の木が枯らされてしまったのじゃ」

この会話のあいだ、アデガは羊を追いたてていた。羊たちは道に出ようと躍起になり、門扉の柱杵のあいだで押し合いへし合いしていた。

#### 第四章

旅籠のおかみは羊たちを泉に連れていき呪いを解こうと、満月の夜が来るのを待ちながら日を数えていた。羊飼いの少女は山で千古の苔で金色になっているケルト族の遺跡の岩陰に腰をおろし、糸を紡ぎながら、顔に聖霊たちの熱い息吹があたるのを感じていた。毎日夕暮れどきになると、あの巡礼者が羊飼いたちに踏みしめられたあの小道をふたたび登ってくることを思い描いていたが、彼女の夢想は決して実現しなかった。ただ人相の悪い男たちが旅籠のほうに登ってくるだけだった。ぶどう酒を一杯あおってから村へと道中をつづけていく、腰の曲がった汗だくの修繕屋たち、血だらけの傷を露出したままの乞食たち、また、剛毛の小馬にまたがった煤で黒くよごれた鋭い目つきの鑄掛け屋たち。アデガは台所の火の近くにしゃがみこんで、彼らが誰の仲裁も入らない中で口論し、脅し合っているのを聞いていた。そのあと、男たちに折り合いが付き、騒ぎが鎮まって、部屋のうす暗い片隅に彼らが集まる様子を察知し、彼女は驚きで目を丸くし、さらにひそかに分配される金の音を聞いた。

旅籠の息子は長らく家をあけた後戻ってきていた。アデガは山でほかの羊飼いたちと一緒に、彼がその間盗賊の一味に加わっていたことを聞かされた。羊飼いたちは少女に恐怖心を抱かせる話をいろいろした。それは、ある夜旅籠に泊まったまま姿を消した旅人の話とか、押し入れられた教会の話とか、路上で朝を迎えた死体

の話であった。三匹の大きな黒ヤギの番をしている老人が、それらの話をいちばんよく知っていた。アデガは毎日旅籠を逃げだそうと考えていた。しかし、夜どこかの人気のない道に迷いこんだところを追いつかれ、自分もまた殺されるのではないかと怖れた。素朴な信仰に包まれた彼女は、あの巡礼者が自分を救いだしにきてくれることを期待していた。そして牛小屋の馨しい干し草の上で眠りながら、夢の中で彼がもうやってきたのを見て溜め息をついた。

巡礼者は羊飼いの少女の夢のなかでその姿を変えていた。光輪が改悛者の頭をとりまき、彼は銀の杖に寄りかかり、その肩マントの貝殻は金色に輝いていた。胸の上で揺れている十字架とメダルと数珠は敬虔な輝きをばらまき、聖者たちの墓から運んできた香りを漂わせていた。巡礼者はあのハリエニシダの中の山道を疲れきってゆっくりと歩いていた。イバラに傷ついたはだしの足から血が流れ、そのしずくの一滴滴にアイリスが花咲いていた。彼が牧舎に入ると、牛はおとなしくひざまずき、犬は両手を嘗め、羊飼いの少女が葦の鳥かごで飼っているクロウタドリは甘美なさえずりで歌い、その声は水晶のようであった。巡礼者は自分の下婢を虜囚生活から解放するために、さらに主人たちの非情と残酷さを懲らしめるためにやってきた。アデガは心が光につつまれる感じがし、同時に目から涙が静かにこぼれだした。彼女はそこにとり残される羊たちのために、犬のために、のど自慢のクロウタドリのために泣いていた。巡礼者は彼女の気持ちを察して、小道から背後に視線を送った。奇蹟が起こるにはそれだけで十分であった。羊飼いの少女が見守るなか、羊たちは一匹ずつ囲い場から出てきて、クロウタドリは飛んできて彼の肩に止まり、犬はかたわらに姿を現し彼の手を嘗めた。

アデガは時々夢の途中で目覚め、犬の執拗な吠え声や馬の走る音を聞いた。彼女は羊飼いたちが語っていた不吉な話を思いだし、恐怖に駆られ、じっとしたまま夜の物音に耳を傾けた。朝になり囲い場に入ったとき、土が掻きまわされているように思われ、また、草には血が飛び散り、それが朝露で消えかかっていると感じた。

## 第五章

一羽の雄鶏が鳴き、さらにもう一羽が鳴いた。真夜中であった。旅籠の広い台所は閑散としていた。アデガは竈の火のそばにすわりまどろんでいたが、大声で呼ぶ旅籠のおかみの声を聞くとぎくりとして体を起こした。

「アデガ！……アデガ！……」

「何ですか、おかみさん？」

「小屋に入って羊たちを外に出しておくれ。今日が満月だってことわからないのかい？」

アデガは眠気でいっばいの目をこすりながら言った。

「なんて言ったんですか、おかみさん？」

「羊たちを外に出すんだ！聖グンディアン教会の泉に出かけるんだ」

アデガは黙って従った。おかみはまだぶつぶつ小言を言っていた。

「よくわかるよ、羊たちがお前のものじゃないってことが！お前ときたら、羊が一匹また一匹と死んでいくのを、手をこまねいたまま放っておくつもりなんだね……まったく情けなくなる！」

アデガは羊たちを外に出した。月の白い光を浴びて明るく静かな山地の夜だった。羊たちは千古の苔で金色になっているあのケルト族の石の遺跡で生贄にささげられるかのように、空地の真ん中に集まっていた。老婆と羊飼いの少女は山道を下っていった。群れの羊たちは臆病そうな啼き声をたててひしめき合い、首のベルの揺れる音がオオカミの眠る遠くの山々にこだまを呼び覚ましていた。番犬は鋏の打ちつけられた幅広の首輪のまわりの毛を逆立て、猛々しい唸り声をたてながら羊たちのかたわらを歩いていた。おかみはオオカミをひるませるために、火をともした藁のたいまつを手にしていた。ふたりの女は自分たちを聖グンディアン教会の泉へと向かわせるあの呪いの神秘と夜の寂寥とに怯えながら黙々と歩いていた。

はるか遠くにクルミの老木の暗い樹冠を見下ろす教会の鐘楼が見わたせた。それは月の銀色に輝く空にくっきりと浮かび上っており、鐘を支えているふたつのアーチ越しに星降る夜の青さが見えた。その村の鐘はふたりの百歳の老婆のように信仰に篤く早起きで純朴であった。境内は青々として馨しく、びっしりと墓に蔽われていた。泉は教会の裏手にあり、おそらく鐘の齢を数えてきたであろうクルミの木がその上に蔭を落としていた。白い月光の下、魔女の話をささやいているかのようにみえる緑色がかった湧水の上に、暗い樹冠が長老のように寛大に枝を広げていた。

老婆と少女は境内の前になると、畏怖の念をいだき敬虔に十字を切った。羊たちは門をくぐりひしめき合って中に入り、そのあと思いのままに広がり、墓のあいだに生えている青々とした草を食んでいた。ふたりの女はあちこち走りまわって群れを集め、そのあとで、呪いを解くために水を飲ませなければならない泉まで羊たちを導いた。羊たちは勇んで駆けつけ泉をとり巻いた。夜の静けさの中で泉の神秘的な清水をかき乱す舌の音が聞こえた。泉の底にその白い姿を映した月が、じっとしたまま奇蹟に目を凝らしていた。

家畜が水を飲んでいるあいだ、ふたりの女は小声で祈りを唱えていた。そのあとで、超自然の神秘の気配におののき、無言のまま境内を出た。羊の群れは女たちの前をうねるように進んだ。月が地平線に隠れ、道はだんだんと暗くなり、黒々とした暗い松林では風が起こり唸り声を立てていた。水たまりのできた人気のない牧場はすでに夜の闇に消え、セレナーデから戻ってきた村の若者たちが灯す藁のたいまつのみかりが遠くで光っていた。ふたりの女は相変わらず無言のまま、羊が一匹たりと離れないように注意しながら群れの後をついていった。旅籠の空地に着いたときはあたりはもうすっかり暗く、はるか彼方で星がいくつか輝いているだけであった。寂寥としたその場所に遠くの海鳴りの音が届いていたが、それは松林に隠れている飢えたオオカミの猛々しい遠吠えのようであった。

老婆は鉄で裏打ちした木靴で門を叩いて呼んだ。なかなか扉が開かないので番犬の吠え声と一緒に繰り返し何度も呼んだ。ようやく中から誰か駆けつけ、かんぬきのきしる音がし、旅籠のおかみの息子が戸口から顔を出した。竈でばちばちと音を立てるシスタスの赤っぽい輝きを背に、額にはちまきをし、血だらけの腕をあらわにした姿がくっきりと浮かび上った。アデガは恐怖が黒い鳥のように翼を広げ自分を蔽うのを感じた。おかみが声をひそめて訊いた。

「誰が来たんだい？」

若者はゆがんだ笑みを浮かべて答えた。

「誰も！……」

「じゃあ、その血は？」

「子を産まないヤギの皮を剥いたのさ」

### 第三部

#### 第一章

ある日の夕暮れどき、アデガは聖クロディオ教会の境内の老齢な糸杉の木陰に腰をおろし、うち砕いたばかりの亜麻の玉を糸巻き棒で次々と紡いでいた。彼女のまわりでは、羊たちが草を食んだり地面をひっかいたりし、番犬は寝そべって、連山の峰々を金色に染めはじめた落日の暖かい愛撫の下でまどろんでいた。突然警戒し、切断された耳の毛を逆立て、体を起こし吠えた。アデガは犬の首をおさえ、心の中で温めてきた幸せが果たされるのではないかという漠とした期待を抱いて、道のほうに目を向けた。すると、彼女のスマイルの眸が微笑んだ。あのうっとりとした無邪気な笑みが口元で震え、聖油のごとく顔いっぱいにはらまかれた。巡礼者が境内に向かって登ってきていた。褐色のひょうたんが杖の先で揺れ、肩マントの貝殻は昔の祈りのような敬虔な輝きを放っていた。彼は疲れきりゆっくりと登ってきた。歩くとき、長髪が改悛者の顔を翳らせ、首にかけた数珠の十字架とメダルは、宣教師の布令のように鳴り響いていた。羊飼いの少女は駆け寄っていき、手に口づけようとひざまずいた。草の上にひざまずいたまま囁いた。

「神が称えられんことを！……ハリエニシダやイバラの中をやってきたのね！……すごいわ！……道中どんなにか難儀したことでしょう！……」

乞食は埃まみれの日焼けした顔でうなずいた。

「この土地には慈悲の心がない……どの道を行いても犬やガキどもに追いかけまわされる。男も女も垣根や柵から顔をだして俺をののしる。せめてこの木陰で休めるだろうか？それから、あんた、今晚牛小屋に泊めてくれるかい？」

「宮殿ならいいんですけど！」

羊飼いの少女の心は、羊の乳のように温かく、蜂蜜のように甘く、牧舎の干し草のように馨しい、神の恩寵の泉に浸りきっていた。彼女の頭上では、巡礼者たちが賛美歌をうたいながら夜明けの花咲く山道を歩いた、あのいにしえのキリスト教世

界の熱烈な祈りが、白い翼の鳩のように羽ばたいていた。乞食は右手で集落のほうを指さし、恨みのこもった声で予言者のごとく叫んだ。

「まったくこの土地ときたら！……慈悲の心を持たないここの奴らときたら！」

深い溜め息をつき一息入れ、杖に額をもたせかけ、ふたたび叫んだ。

「まったくここの奴らときたら！……きっと天罰が下るよ！」

アデガは両手を合わせ、控えめな口調で無邪気に言った。

「もう天罰は下ってるわ。ほら見て、栗林が枯れてるし……ぶどうの木も枯れ死んでる……この災害は天から降ってきたものだわ！」

「もっとひどいのがやってくるはずだ。羊たちは一匹残らず死に、その肉は毒にかわる……七つの王国を滅ぼすこともできるすごい量の毒に！……」

「それでも悔い改めないの？」

「悔い改めない。悪徳の申し子たちはわんさといるんだ。女は地獄の王と同衾する、ものすごい美男子に姿をかえた魔王とな。悔い改めない！けっして悔い改めないだろうよ！」

巡礼者は帽子をとり、それを草の上にほうり投げ、喉の渇きを癒そうと境内の泉に近づいた。アデガはそれを制しておずおずと言った。

「あの、もし……羊の乳を召しあがらない？そこにいるこども連れの羊、りっぱなお乳してるでしょう。それが出す乳はバターみたいなのよ！」

巡礼者は立ち止まり、境内の真ん中の芝生の上に群れ集まっている羊たちを貪欲そうな目で見た。

「どの羊だい？」

「あのおちのこどもを連れている白いの」

「乳をしぼれるのかい？」

「もちろんよ！」

こう言ってから羊飼いの少女はやさしく呼びかけながらその羊に近づいていった。

「ウルターダ！……おいで、ウルターダ！……」

羊が啼きながらやってくると、アデガは羊毛に手をからませ抑えつけた。

## 第二章

巡礼者の目は少女と羊にじっと注がれていた。彼は光沢のある杖にもたれかかり、髪の乱れた埃だらけの頭をあらわにしたまま、境内の真ん中に立ち止まっていた。アデガは何度も繰り返しかう語りかけていた。

「じっとしていて、ウルターダ！」

乞食はいぶかしげなそぶりを見せて訊いた。

「なあ、ひょっとしてその羊、あんたのじゃないんでは？」

「あたしのは一匹もないわ！……みんな旦那さんのだもの。ごらんの通り、あたしは羊番よ」

こう言って彼女は目を伏せ、羊の鼻面をなでた。羊は舌を伸ばし彼女の手を舐めた。それからアデガは乳をしぼるために草の上にひざまずいた。子羊が母親の脇腹近くでじゃれついていたが、少女はやさしく命令した。

「だめ、じっとしてて！……ウルタードったら！……」

「どうしてウルタード(くすね盗り)なんて名前と呼ぶんだい？」

アデガは巡礼者のほうにおずおずとそのスマレの眸を上げた。

「誤解しないでください……」

「それじゃその羊、以前は誰のものだったんだい？」

「前はある羊飼いのものだったの……旦那さんにこの羊を売った羊飼い、その四匹と一緒に……その人の名前がウルタードっていうの。山のむこう側に住んでるわ」

「いい羊だ！……みんなカステイーリャ産のようだな」

「そう、カステイーリャ産よ。聖クロディオさまのご加護がありますように！」

敬虔でつつましかやかな面持ちで、彼女はコルクのお椀に乳をしぼりはじめた。それはその一帯で名の知られたある老齢な牛追いの作った椀であった。コルクが生温かい泡立つ乳でいっぱいになっていくあいだ、少女はこう話しつづけた。

「あの毛のふさふさした七匹を見て……どれもドルミーダ(居眠り)って呼んでるの。まだ子羊の頃ある牧夫頭が旦那さんに売ったんだけど、その人ラバに乗って市から帰るとき、いつも居眠りしてるからなの、もうみんなが知ってることだけど……」

彼女は立ち上がり、目を伏せたまま、はずかしそうに頬を赤く染め、乞食にあの羊の恵みを差しだした。巡礼者はごくごくとうまそうに飲んだ。何度か息をつぐために飲むのをやめ、つぶやくように言った。

「すごいご馳走だよ、あんた！……すごいご馳走だ！」

飲みおわると、羊飼いの少女は彼の手からすばやくお椀を取りこぼした。

「別の羊の乳をしぼりましょうか？」

「それには及ばんよ。使徒聖ヤコブさまがあんたに報いてくださるように！」

アデガは微笑んだ。そのあとで月桂樹の老木にかこまれた境内の泉にいき、巡礼者が聖別したコルクに水を満たし、隠れて歌っているナイチンゲールの声を聞きながら、つつましくも幸せそうに飲んだ。巡礼者はやってきた道、とうもろこし畑の中の埃っぽい平坦な道先へと歩きだした。羊飼いの少女の目は、彼の姿が曲がり角から消えるまでその後を追っていた。

「道中気をつけて！」

少女が溜め息をついて番犬を呼ぶと、駆けつけてきて、聖クロディオ教会の境内いっぱいには散らばった群れを集めはじめた。一匹の子羊が境内の石垣によじ登り、下りられないで啼いていた。アデガは腕に抱き取り、なでてやりながら糸杉の下にいき、しばらく腰をおろした。子羊は愛嬌たっぷりのいたずらっぽい仕草で、白い星印の描かれた額を羊飼いの少女の指に預けていた。不安がすっかりおさまると、跳びはねながら逃げだした。アデガは芝の上から糸巻き棒を取りあげると、また糸

を紡ぎだした。

はるか彼方の山腹では、いくつかの群れがばらばらになって、遠く離れた囲い場  
に下っていたが、先頭の群れは収容されはじめていた。たそがれどきの静けさの中  
に、羊たちのベルの音や群れを導く羊飼いの若者たちの掛け声が聞こえていた。ア  
デガは自分の羊たちを急きたて、道にでる前に、水を飲ませようと境内の泉に連れ  
ていった。濡れた月桂樹の下、たそがれは敬虔な王女の心のように青くもの悲しかっ  
た。人馴れした鳩が飛んできて森厳な糸杉に止まると、その時に起こった黒い枝葉  
の揺れる音が、月桂樹にかこまれた靈験あらたかな泉の音と合わさった。泉では医  
者のまねごとをするもの知りの女乞食が、芳しいアオイの葉で弱った膝を癒してい  
た。水を受けて運ぶ緑がかったコルクの桶の下では、よく響く水がめから水があふ  
れ、田園の歓喜の歌をうたっていた。羊たちは苔むした縁石のまわりで押し合いな  
がら、頭を突き合わせて水を飲んでいて、飲みおわると、鼻先からしずくを滴らし、  
ベルの音をたてながら泉から離れた。ただ一匹の子羊だけが泉に近づかなかった。  
その羊は月桂樹の下で両膝をつき、息絶え絶えの声で苦しそうに啼いていた。羊飼  
いの少女は巡礼者が遠ざかっていった小道にじっと目を注ぎ、無邪気に泣いた。主  
人たちの罪に対するこらしめが主イエス・キリストにより羊たちに下される様を目  
のあたりにしたので泣いたのであった！

### 第三章

アデガは子羊を背負い旅籠への道を急いでいた。羊は夕暮れの静けさの中で苦し  
そうな啼き声をたてていた。少女はオオカミにおびえ、先を行く羊飼いたちに待つ  
てくれるように大声をかけた。彼らに合流すると喘ぎながら訊いた。

「サン・クロディオ村のほうにいくの？」

年老いた羊飼いが重々しい口調で答えた。

「そのつもりじゃ。すべては神さまのみがご存じさ。それで、お前さんは旅籠まで  
登るんかね？」

「うん、そうよ……」

「それじゃ、群れが混ざらないよう気をつけてくれ」

「そのことだったら心配しないで」

アデガは子羊の重みでへとへとになり、息を切らして答えていた。羊は相変わら  
ず悲しげな声で啼いていた。老人はしばらく無言のまま歩いたあとで訊いた。

「その羊どうかしたのかい？」

「どうしたのかわからないの」

「急にそうなったのかい？」

「そう、急によ……」

羊たちの群れは緑色の縁をつけた長い人気のない山道をうねるように進んでいた。  
その道のはるか先のほうは落日のバラ色の靄につつまれていた。ときおり羊飼いた

ちは群れが混ざらないように大声をだし、腕を振りながら走った。そのあとアメジスト色に染まった山地では、ふたたび夕暮れの静けさが支配した。空中には揺れる青い影が広がった。その影は、たそがれどきに隠遁者の食物をくちばしにくわえて山々を飛ぶあの天上の鳥の翼のように、宗教的で神秘的であった。アデガは坂の登り口にくと、こらえきれず道端に腰をおろし、草の上に子羊をおろし、ぐったりとして溜め息をついた。老人が言った。

「さあがんばって、もうひとふんばりじゃ！」

彼女は涙声で答えた。

「もう歩けないわ……」

アデガはひとり生垣のそばにとり残された。悲しげな目で他の羊飼いたちが遠ざかるのを眺めていた。あたりが暗くなりはじめたので、恐怖にかられ、彼らの姿が曲がり角に消える前にふたたび歩きだした。だが夜は彼らをますます遠ざけていった。少女は追いつこうと走った。

「あたしひとりここにおいていかないで！待って！待っていて！」

彼女の叫び声は人気のない道に悲痛なこだまを呼び覚まし、息をつこうと口をつぐむと、子羊の啼き声がさらにも悲しく、消え消えになって響きわたった。羊飼いの老人の声が暗がりの中で聞こえた。

「さあがんばって、待っていてやるから」

アデガは羊たちを急きたてながら走った。そして、恐怖をまぎらわそうと、胸を引き裂くような大声で羊飼いたちと話していたが、彼らの応答はますます遠ざかっていった。

「走れ、アデガ！……走れ！……」

こうして、追いつくことはできなかったが、懸命に群れを追いたてながら、旅籠のある空地にたどり着いた。門の大扉が開いており、道から竈の火がはっきりと見えた。羊のベルの音を聞きつけ、おかみが戸口に出てきた。アデガは彼女にかけ寄り、敬虔な声でそっと言った。

「この羊を見て！……他のと同じように病気になったの、おかみさん」

老婆は悲嘆にくれながら、やさしく羊を抱き取り、ふたたび台所に入った。火の近くにすわり、呪文を繰り返しながら子羊の額にソロモン王の円を描いた。

「魔女よ、出ていけ！魔女よ、出ていけ！魔女よ、出ていけ！」

旅籠で休憩していたルガール・デ・コンデスの若い山男が、穏やかな弱々しい声で言った。

「明らかに、その羊は呪いをかけられたんだよ！……」

誰も何も言わなかったので、若者は黙って火を眺めていた。体の大きなたくましい羊飼いで、純真な目と清純な赤い口をしていた。生えはじめたちぢれた髭がその赤ら顔をうっすらと縁取っていた。山で殺したオオカミを背負い、各戸をまわり心づけをもらおうと町へいく途中であった。長らく火を眺めたあとで、つぶやくよう

に言った。

「俺の前の旦那なんか羊たち全部に呪いをかけられたよ」

旅籠の息子は台所の奥で大櫃の上に寝そべっていたが、ゆっくりと身を起こした。

「それでどうしたんだい？」

「呪いをかけたやつに会い、小麦一袋でそれを解いてもらうことさ。俺の旦那はそいつが誰かわからなかったけど、ある女祈祷師が教えてくれたんだ、病気のいちばん重い羊を焚火の中に生きたまま投げ入れてみろって。悲鳴を聞いて最初に駆けつけたやつ、そいつが……」

旅籠の息子は大櫃の上でさらに体を起こして言った。

「それで、やってきたんかい？」

「やってきた」

「それで、旦那は小麦一袋をやったんかい？」

「そうするより仕方なかったんだ」

「畜生め！」

それから息子はふたたび大櫃の上に寝そべった。山男は出立しようと立ち上がった。その影が台所の壁一面を蔽っていた。大きな掛け声をひとつ発して、足もとにおいてあったオオカミの死体を背中にかつぎ、先に鎌が取りつけてある長い棒をつかみ、出ていった。戸口のところで振りかえり、こどもっぽい疲れきった声で言った。

「では、みなさんお達者で！」

家畜を囲い場に入れ戻ってきたアデガだけがそれに応えた。

「道中気をつけてね！」

#### 第四章

牛小屋の入口に腰をおろし、アデガは巡礼者を待っていた。その日の夕暮れに聖クロディオ教会の境内に姿を見せたとき一夜の宿を求めたからであった。番犬は身を伏せて見張っていた。空地には遠い月の光が降り注ぎ、同じく遠い海鳴りの音が聞こえていた。突然羊飼いの少女は不安にかられ身震いした。旅籠の扉が開いた。わら束を手にしたおかみが顔をだし、空地の真ん中で焚火を起こした。彼女は火の上に身をかがめ、枯れたシスタスをくべていた。一方、旅籠の息子は、奥の台所の炎に赤く染まり、牛の綱をつかって子羊の足を縛っていた。子羊の震える啼き声はアデガの心をかき乱した。その声はこどもの泣き声のように高まり、夜の青さいっばいに広がるように思われた。ゆらめく炎の中でシスタスがぱちぱち撥ね、老婆は煙が目にしみて出てくる涙を拭いていた。息子が戸口に顔を出し、そこから険しい表情で残酷にも子羊を焚火の中に投げ入れた。アデガは震え上がり顔を蔽った。長々とした突き刺すような苦悶の啼き声が炎の中から上がった。老婆は火を掻きたて、目を真っ赤にして月明かりの下伸びている白っぽい無人の道を見張っていた。突然

息子に声をかけた。

「ほら、あそこをごらん」

こう言って、遠くで立ち止まっているように見える、背の高い浮浪者らしい人影を指し示した。息子がささやくように言った。

「誰でもいい、来させよう……」

「変に思って引き返すかも！」

アデガは道のほうを見る勇氣もなく溜め息をついた。やってきたのがあの巡礼者ではないかと思い、彼女の心臓は震えあがっていた。祈ろうと手を合わせたが、その時おかみが大声で言った。

「お前はさがってお休み。明日はおてんとさまと一緒に起きなければいけないんだから！」

彼女は従順に起き上がった。そのやさしいスマイルの眸で周囲を見まわし、ざくりとした。あの巡礼者が羊飼いの少女の前に初めて姿を現したあの小道の真ん中で立ち止まっていた。アデガはしばし眺めていたが、やがて牛小屋に入り、干し草の山に横になりいった。溜め息をつきながら彼女はその爽やかで馨しく快適な臥所に頭をもたせかけた。番犬が戸をひっ搔きながら吠えはじめた。戸は立てかけてあるだけだったので、ゆっくりと開いた。アデガは起き上がった。牛小屋の戸口の上では、金色の眉毛とうっとりした微笑をもつその羊飼いの少女が夢想する奇蹟のように、はるか遠い無垢な月明かりが震えていた。

子羊の啼き声がだんだんと消えると、肩に鎌をかついだ旅籠の息子が空地を横切った。アデガは恐怖を覚え、全身震え上がって目を閉じた。長い間そうしたままでいた。自分の体が干し草の上で縛られていているような気がしていた。やがて悲しみと苦しみにうちひしがれた彼女を睡魔が襲った。それは重いが見えない影のような黒いペールで、彼女の全身をゆっくりと蔽っていくかのようなようであった。突然、人氣のない小道の真ん中に自分がいた。木靴の先で震える神秘的な月明かりに導かれ、道を進んでいった。泉の音が聞こえた。それを取り巻く木々にはカラスが鈴なりに止まっていた。巡礼者がその葉陰を遠ざかっていく。肩マントの貝殻は暗い道の中で星のように輝いていた。その光に尻ごみしながら飢えたオオカミの群れが後をつけていた……突然羊飼いの少女は目を覚ました。風が牛小屋の戸を叩いていたので、彼女は閉めにいった。空地の真ん中では焚火の残り火が光っていた。遠くで陰にこもった海鳴りの音が鳴り響いていた。旅籠の外である人影が声をひそめて呼んでいた。夜の中で肩の鎌が不気味な凶暴性を帯びきらめいていた。内側から音もなく扉が開き、そのあとささやき声が聞こえた。アデガには誰の声かわかった。息子が言った。

「この鎌を隠してくれ」

すると、母親が言った。

「埋めてしまったほうがいいよ」

恐ろしさに震え上がったアデガは外に飛び出し、不吉な予感に導かれるまま、恐怖の洗礼を浴びた山地の夜の白い月明かりの中を走った。

### 第五章

羊飼いの少女が山中を走りまわったあと、目を泣き腫らし疲れきってある泉のほとりにたどり着いたときは、もう夜明けであった。そこが夢に見た場所とわかったちょうどそのとき、草の上に巡礼者の体が倒れているのを見いだした。右手には杖を持ったままで、はだしの足は蠟のようで、贖罪の長髪の下には土気色の横顔がみえた。アデガは倒れるようにひざまずいた。

「ああ、主イエスさま！」

彼女は敬虔な震える手で、硬直した顔にくっついた泥と血まみれの乱れ髪をかきわけ、その上に涙を流しながら心をこめてやさしく口づけた。

「かわいそうに！……どこでエルサレムの死刑執行人たちに会われたの？……あいつらにはものすごい罰が下されるわ！……いとしいお方、なんてひどい目にあわされたんでしょう！空から天使がおりてきて、鉄の重しをつけて全キリスト教世界をひきずりまわすことになるわ。そして、どこへいこうが追いかけれ石を投げつけられることに……あたしの導きの光！……ああ、主イエスさま！偉大な主イエスさま！」

その頭上では小鳥たちが歌い、朝の到来を歓迎していた。丘のふもとでは早起きのヤギ飼いがふたり群れを導いていた。遠くの村々ではかすかな白い煙がたち昇り、さらに遠くでは殉教者聖クロディオ教会の糸杉が、琥珀色の光をあびたその樹冠をもたげていた。数人の村の女たちが壺に水をくもうと泉に下りてきた。羊飼いの少女の叫び声を聞きつけると、道のところから蒼ざめ驚いた表情で訊いた。

「どうしたんだい、アデガ？」

アデガは草の上にひざまずいたまま、絶望した様子で、巡礼者の体の上に両腕を伸ばした。

「見て！これを見て！」

「もう冷たいのかい？」

羊飼いの少女はすすり泣きながら言った。

「すごく冷たいわ！」

「縁のあるひとだったのかい？」

「主イエスさまだったの」

女たちは迷信と疑念の入り混じった目で彼女を見た。それから泉に下りてきて十字を切りながら訊き返した。

「いまなんて言ったね、あんた？」

アデガは口元をひきつらせて叫んだ。

「主イエスさまだったのよ！ある晩牛小屋にきてあたしと一緒に休みになったの。」

干し草があたしたちのベッドだったのよ」

こう言って彼女は変貌した顔をあげた。目の奥では神秘的な光を放つ炎が燃え、金色のまつげは涙で蔽われていた。女たちはふたたび十字を切った。

「あんた、悪霊に憑かれてるんだよ！」

女たちは壺を腰にかかえ、アデガをとり巻き、奇蹟好きで悲劇的な口調でささやき合っていた。羊飼いの少女は草の上にひざまずいたまま叫んだ。

「見ているがいいわ！あの冷酷なやつらがこの世のすべての労苦に苛まれるのがわかるから。そして最後にはあちこちひきずり回されて死ぬことになるわ。あいつらが通るときにはイラクサが生えるわ！……」

女たちは半信半疑といった様子でふたたび訊いた。

「でも、縁のあるひとだったのかい？」

アデガはひざまずいたまま体を起こし、声を嗄らして叫んだ。

「主イエスさまだったのよ！……みんなこのことを否定できて？あんたたちもひきずり回されることになるわよ！」

女たちは少女の言葉を聞いたあと、ゆっくりとその場から離れた。壺が泉の水でいっぱいになるあいだ、驚いた様子で、だが声をひそめ、あれこれ話していた。

「その巡礼はもう長らくこのあたりを歩きまわっていたよ」

「すごく口の達者なやつだった！」

「で、あの子はどうして主イエスさまだったなんて言うんだらう？」

「あの子は悪霊に憑かれてるんだよ」

「まったく、その通りかもしれないねえ！」

女たちは泉のまわりに集まって話していた。その顔が水面にゆれて映っていた。彼女たちの会話は魔女物語のような神秘をたたえていた。泉からあふれ出た水がイグサの低地を流れ、水たまりとなって止まり、芝生の花々を銀色に彩っていた。

## 第六章

羊飼いの少女はもう旅籠には戻らなかった。おのれの悲しみを訴えながら、あてもなくあちこち歩きまわり、哀れんで宿にと提供してくれる干し草置き場で眠った。畑を耕していた村人たちは、彼女を遠くから目にとめると仕事の手を休め、話しを聞こうと沿道までゆっくりとやってきた。アデガは通りがかりに悲痛な涙声で言った。

「みんな今にわかるわ、すばらしい赤ちゃんがあたしに生まれるのが！……その子が誰かわかるわ、額に光輪があるから。哀れな羊飼いと主イエスさまのあいだに生まれるのよ！」

村人たちは迷信深く十字を切った。

「かわいそうに、悪霊に憑かれてるんだよ」

アデガは息を切らし、はだしのまま、両腕を高くあげ、唇を震わせてその予言の

言葉を叫びながら、道の彼方に姿を消していった。休憩するのは山で羊飼いたちと一緒にになったときだけだった。ケルト族の古い遺跡の岩陰に腰をおろし、彼らに自分の見た夢を語って聞かせた。太陽が沈むところで、山の頂に止まるハゲタカたちが、真っ赤に染まった西空を背景にその広げた翼をはばたかせていた。

「すばらしい赤ちゃんよ、おてんとさまみたいにすばらしい！一度もうこの腕に抱いたことがあるの！聖母マリアさまが抱かせてくれたの！あやすのに腕がくたびれてしまったわ！」

ある年老いた羊飼いが言い返した。

「生まれてもいないのに、どうやって腕に抱いたんだね？ああ、あんた、聖シドランのお祈りを逆から唱えてくれる司祭を探すがいい！」

別の羊飼いが目を爛々とさせて繰り返した。

「奇蹟が起こったのかもしれない！奇蹟が起こったのかも！」

アデガが叫んだ。

「この手であやしたのよ。あの笑顔ときたら朝焼けみたいだったわ」

その確信に満ちた話しぶりは、羊飼いたちの純朴な幻想を呼び覚ました。彼らはアデガをかこんで草の上にすわり、驚嘆のまなざしで彼女を見つめ、革袋から軽食をとりだし、敬虔な面持ちでしきりに勧めた。そのあとで、彼らもまた奇蹟や不思議な出来事を語った。隠遁者の話、隠された財宝の話、魔法をかけられた王女の話、主のご降臨の話。三匹の黒ヤギを山に連れてきていた老人はこの種の話をとくさん知っていたので、一日中、日の出から日没まで語りつづけることができた。百歳近い年齢で、その話の多くは彼がまだ若いころに起こった出来事であった。老人は三匹の黒ヤギに目をやりながら、祖父母の家で飼っていた長蛇の羊の群れを山に連れていったあの頃を懐かしみ、溜め息をついていた。純朴な心をもつ羊飼いたちがいつもその老人の話聞いていた。それはあの遠きよき時代のことだった。彼の目の前にひとりの貴婦人が現れ、木の根元に腰をおろし、金の櫛で長い髪を梳いていた。老人の話に何人かの羊飼いが無邪気な驚きをこめてささやいた。

「魔法にかかった王女さまだったんだね！」

この話をすでに知っている他の羊飼いたちがそれに答えた。

「モーロの王妃だったのさ、アラブの巨人に囚われていた！……」

老人はもったいぶった様子で頷き同意した。それから遠くへ行かないように三匹のヤギに声をかけてから、話をつづけた。

「モーロの王妃だったのじゃ！……かたわらの草の上にはふたの開いた銀の小箱があつてな、高価な宝石がつまっております、日にあたってきらめいていた……ずいぶんとも淋しいところで、貴婦人は金の櫛を髪にさしたまま、白い手でわしを手招きした。それはまるで宙を飛ぶ鳩のようじゃった。わしは子供だったから、懸命に逃げた、逃げたんじゃ……」

すると羊飼いたちは無邪気なざわめきをたて、話をさえぎった。

「俺たちに現れてくれたらなあ！」

老人は老齡な語り手特有のゆっくりとした敬虔な口調で応えた。

「近寄るものはみんな魔法をかけられ死ぬことになるんじゃぞ！」

すると同じ話を何度も聞いているあの羊飼いたちが、まだ一度も聞かされていない他の者たちに説明してやった。ひとりが言った。

「あんたたちは知らないんだよ、旅人に魔法をかけるために、そのものすごい美しさで引きつけるってことを」

別の羊飼いがつけ加えた。

「すごい宝石を見せてだますんだよ」

さらに別の男がおずおずと言った。

「俺の聞いた話じゃあ、宝石全部の中でどれがいちばん気に入ったか訊くというんだ。それで旅人はそんなにもたくさんのブローチや指輪、腕輪や宝石を見て目が眩んでしまい、選びはじめる。こうして魔法にかかってしまうってことだよ」

老人はざわめきがおさまるまで待ってから、ひどく謎めいた声で、老人ならではの卓見を披露した。

「王妃の魔法を解いてやり、それから結婚するには、こう言えば十分なのじゃ。たくさんの宝石の中でただ欲しいのはあなただけと。みんなこのことはわかってるが、欲に目が眩み、そう答えるのを忘れ、宝石を選びはじめるのじゃ……」

若者たちのざわめきが、とほうもない激しい欲望のようにふたたびわき起こった。

「俺たちに現れてくれたらなあ！」

老人は哀れむように彼らを見た。

「気の毒にな！その魔法を破れる者はいまだひとりも現れておらんじゃよ……」

それから羊飼いたちはみんな、夢想の風におのれの心の青い湖面をかき乱されたかのように、他の不思議な出来事を思い起こそうとした。それらは決まって山中に隠された財宝とか、恐水病にかかったオオカミとか、その臨終の際に聖グンディアン教会の弔鐘がひとりでに鳴ったという聖なる隠遁者とかの古い話であった。ふたりの老齡な尼僧院長のように敬虔で早起きで素朴な、太陽とともに目覚めるあれらの鐘よ！アデガは自分の目の前で光芒のように繰り広げられるこれらの話を注意深く聞いていた。そしてふたたび歩きはじめると、彼女の心のなかで、魔法にかかった王女はアラブ人に囚われた敬虔な乙女に変わり、隠された財宝は山の中をほじくりまわす羊たちに見つけだされ、それでもって金の貝殻で屋根全体を葺いた銀の礼拝堂がつくれると思った。

「その礼拝堂で洗礼を受けることになるのよ、主イエスさまがあたしに授けてくださる赤ちゃんは！見ているがいいわ！その夜明けには鐘がひとりでに鳴りだし、ユダヤ人たちが泉のそばで殺したあの聖なる巡礼者がよみがえるから。みんな見ているがいいわ！」

こう言ってからアデガは息を切らし、はだしのまま、両腕を高くあげ、唇を震わ

せてあの予言の言葉を叫びながら、道の彼方に姿を消していった。

## 第四部

### 第一章

曙光とともにアデガは目覚める。朝露が彼女のブロンドの髪の上で輝いている。野原をさまよい歩いたあと、道端で眠ったのだった。夜へのおびえがまだ残っている目あたりを見まわし、そこがどこで、点在する家々がどの村のものか調べる。ひとりの老婆が孫の手をひき小道を歩いてくる。アデガはふたりがやってくるのを見て、寒さにかじかんだ体を起こす。

「町に行くの？」

「そうだ、あっちへ行くよ」

「あたしもそうなの」

老婆とこどもは歩きつづける。アデガは砂だらけの木靴を石の上で叩いてから、それを履く。そのあと腰を曲げて歩いている老婆に追いつこうと駆けだす。老婆は声をたてずに泣いているこどもにあれこれ説教し、こどもは頷いている。

「これからは自分で食っていくんだから、人様の言うことは何でもよく聞くんだよ、それが神さまの教えってもんだ」

「うん、おばあちゃん、わかったよ……」

「これからお前の面倒をみてくれるひとやそのご先祖さまのためにお祈りを唱えるんだよ」

「うん、おばあちゃん、わかったよ……」

「サン・グンディアの市でお金がたまったら、蓑をひとつ買うんだよ、雨が多いからね」

「うん、おばあちゃん、わかったよ……」

その道の寂寥感がこどもの抑揚のない言葉をいっそうもの悲しくさせる。その言葉は人生をはじめるときに行う謙虚と忍従と清貧の誓願のようである。老婆は前掛けを頭にかぶり、溜め息をつきながら大儀そうに木靴をひきずっている。木靴は道の小石にぶつかって音をたてている。孫は寒さに震え泣いている。ほろの服をまとっている。少年は白子で、日に焼けた頬はそばかすだらけである。昔の農奴のように前髪を額の上で短く切り、まっすぐ垂れた薄色の長髪はとうもろこしの毛を思い起こさせる。祖母と孫はずっと道の端を歩きつづけている。もう一方の端を羊飼いの少女が一緒になって歩いている。しばらくしてから老婆が彼女に尋ねる。

「あんた、どうして主人を探さないんだい、そしてあちこち歩きまわるのをやめないんだい？」

アデガは目を伏せる。老婆のその忠告は施しものをもらいに立ち寄る家々の戸口でも、夜泊めてもらう牧舎でも、あらゆるところで聞かされる。これに対し彼女は寂しげなスマイルの眸の上で金色のまつげを震わせながらいつも同じ返事をする。

「探してるんだけど見つからないの」

老婆は格言ふうにつぶやく。

「歩きまわったって主人には出くわさないよ。キイチゴの実に出くわすのが関の山だ」

それから孫の手をひき無言のまま歩きつづける。遠くで犬の吠え声と雄鶏の鳴き声が聞こえる。ゆっくりと太陽が山々の頂を金色に染めはじめる。草の上では露が光り、木々のまわりでは巣立ったばかりの若鳥が臆病そうな羽ばたきで飛びまわり、小川が笑い声をたて、木立がさんざめき、青草にふち取られたもの悲しく人気のないその道は、種まき期やぶどうの収穫期の古道のように目を覚ます。羊たちの群れが山腹を登り、女たちが歌をうたいながら水車小屋にとうもろこしとライ麦を運んでいく。小道の真ん中を主席司祭がゆっくりと馬を進め、村祭りの説教に向かっていく。そばを通るときに、老婆と羊飼いの少女と孫は挨拶を送る。

「こんにちは！」

主席司祭はおとなしい博士然とした足どりの牝馬の手綱を引き、たち止まる。

「市にでかけるのかね？」

老婆が答える。

「あたしたち貧しいものには市ですることなんてありませんよ！この子の主人を探しに町へ行くんです」

「キリスト教の教理は知っているのか？」

「知ってますとも、司祭さま。貧乏だってキリスト教の信仰は奪えませんか」

「で、その娘は、何をしているのかね？」

「この娘はあたしの身内じゃありません。かわいそうにこの娘には時々悪霊が憑くんですよ」

アデガは目を伏せて聞いている。主席司祭は重々しくも寛大な態度で少女に尋ねる。

「両親はいないのかね？」

「いません、司祭さま」

「それで、何をしているのかね？」

「物乞いをしています……」

「どうして主人を探さないのかね？」

「見つからないの……」

「困ったことだ！ともかく物乞いをしてまわることはやめねば」

主席司祭はゆっくりと祝福の言葉を垂れ、牝馬の堂々とした足どりのもと遠ざかっていく。老婆はふたたび忠告めいた口調で言う。

「いま聞いただけろう……今日町で奉公人の市がたつんだよ。あたしゃ孫を連れてそこへ行くとさ。あんたもあそこで主人を探すんだね、たとえ食わしてもらっただけの奉公でもいいから」

アデガは諦めたようにつぶやく。

「旅籠でも食べさしてもらっただけの奉公でした」

そう言ってまた思いだすと、ぼろ服にくるんだ体を恐怖にうち震わせ、奇蹟を信じ夢想にふける。

## 第二章

町のある郷士の館の蔭で休みながら、羊飼いの少女は驚いた目で人々の行列を眺めていた。一方老婆はそのかたわらに腰をおろし、両手を前掛けの中に入れ、相変わらず忠告めいた口調でささやきかけていた。

「ここでじっとしてらんだよ、大声だしたり口をきいたりしないで」

「うん、そうするわ」

「大声だすんじゃないよ！」

「言うとおりにするわ」

「あたしの孫を見てごらん、いい子にしてるだろ！」

「うん」

館の蔭では婚礼の日のように、ショールとずきんを身につけた饒舌な老婆たちも休んでいた。それから、まだ一度も奉公したことがなく、はだしの足を黄色のスカートで恥ずかしそうに隠している少女たち、巡礼の時に歓声をあげて歩きまわるあの若者たちのように威勢のいい若者たち、山から下りてきて郷愁にかられている娘たち、さらに木靴を手でもっている控えめな少年たち、昔の農奴のように前髪を額の上で短く切っている。茶色のずきんをかぶったあの抜けめない物言いの盲人が、杖の石突きで敷石を叩きながら、通りの真ん中を行ったり来たりしていた。背負い袋の口からは、村々を巡り歩いて施しものとして頂戴してきたとうもろこしの黄色い穂がのぞいていた。あの饒舌な老婆たちのひとりが彼に声をかけた。

「ねえ、話があるんだけど！」

盲人はだれの声かわかり、立ち止まった。

「あんた、サベラ・ラ・ガラーナだね？」

「その通り。ブランデソのお館にいったかい？」

「二日前あそこに寄ったよ」

「女中が入り用か訊いてくれたかい？」

「確かに訊いたよ」

「で、なんていう返事だった？」

「自分であっちへ行って執事と話すようにだっせ。あんたのことはすべて請け合っ  
ておいたよ」

「それはどうもありがとさんよ」

祖母もまた盲人に声をかけた。

「ちょっと！あたしの孫のことなんだけど、どこかやさしく扱ってくれるような家

のつてはないかね？まだ一度も奉公したことがないんでね」

「年はいくつだい？」

「自分で食っていける年だよ。聖ヤコブ祭の月で九つになった」

「気のきく子だったら、かわいがってくれる主人にはこと欠かないさ」

「あたしゃ貧乏だけど、お礼はできる限りのことをさせてもらうよ」

「こどもと一緒にここで待っていてくれ、あとでいい話をもってこられるかもしれないから」

「もうひとり気の毒な娘のことも頼みたいんだが」

「戻ったときにしてくれ」

こう言って彼は杖の先で敷石を叩きながら遠ざかっていった。三人の若者が遠くから彼に声をかけた。

「ちょっと、エレクトゥス。セラの司祭さまの下男が暇をもらったって話だけど」

「何も聞いてないよ」

「代わりを探すように頼まれなかったかい？」

「今回は何も言われなかったよ」

「それじゃあ嘘だったんだな」

「そうかもしれん」

「で、何か働き口を知らないかい？」

「お前さんたちにぴったりなのをひとつだけ知ってるよ」

「どこだい？」

「ここさ、この町だよ。伯爵さまの三人の孫娘さ。新鮮であてやかな三本のバラだよ。お前さんたち一本ずつ取るがいい」

それを聞いて若者たちは笑いながら言った。

「そのバラにはすごく長いトゲがついてる。あんたにしか摘めないよ」

それから彼らは若者らしく無邪気にふたたびどっと笑った。アデガは仕える人が見つからないのではと心配して、あらゆるものに不安に満ちた視線を注いでいた。誰かが自分のそばを通ると、彼女は懇願するように悲しげなスマイルの眸を上げたが、誰ひとり彼女に目をくれなかった。郷土たちが古い乗馬用の鞍をつけたやせ馬の手綱をひいて通り過ぎた。老農夫たちがテカテカの絹地のマントをひきずりながら通った。製粉で白くなった粉ひきたち、コールテンのズボンの銀ボタンをひけらかす配達夫たち、大きな傘を小脇に抱えた生白いが男らしい感じの田舎司祭たち。召使を探しにきた人たちは列をなし、立ち止まって訊いていた。

「お前、年はいくつだね？」

「わかりません、でも十二くらいだと思います」

「草は刈れるか？」

「ええ、旦那さま、刈れますとも」

「それで、いくら欲しい？」

「それはお気持ち次第で。これまでは食べさせてもらうだけの奉公でしたから」  
それから少し前に進んでから訊いた。  
「あんたはどこから来たんだね？」  
「セラから一レグア入ったところですよ」  
「どこで働いていたのかね？」  
「奉公したことは一度もありません」  
それからさらに先にいってから尋ねた。  
「お前さんはこの町で奉公していたのかい？」  
「ええ、旦那さま、奉公してました」  
「長年かね？」  
「七年を越えます」  
「何人に仕えた？」  
「ふたりです」  
「どのくらい貰っていたのかね？」  
「場合によりけりです。いくらあげることになっているのですか？」  
「わしも同じように答えるよ、場合によりけりだって」  
「おっしゃる通りで。奉公人の仕事ぶりに応じて主人は給金を支払うものですからね。自慢するわけじゃないですが、話がまとまったら、決してご不満なことはないと思いますよ」

人垣ができると、必ずとっていいほどお節介なおしゃべり女たちが近づいてきた。

「こんにちは、いいお天気で！この子の親は正直者でした。給金の折り合いをつけたほうがいいですよ。すぐにお屋敷にとって忠義者になりますから。きっといい奉公人だってわかりますよ、誓ってこんないい子はいません」

こうして彼女たちは人垣から人垣へと渡り歩いたが、茶色のずきんの盲人がみんなから博している愛顧を享受することはなかった。彼が杖の石突きで敷石を叩きながら通りの先の方にふたたび姿を現すと、あちこちから彼を呼ぶ声がまた上がりはじめた。彼はいまや空になった子羊革の背負い袋を揺すりながら応えていた。

「こう重くては体が折れ曲がりそうだよ！……どこか休めるところに行かせておくれ」

老いも若きもこれを聞いて笑った。祖母も陽気な声で叫んだ。

「ここであんたを待っていたんだよ、天蓋を用意してね」

盲人は重々しい声で言った。

「それではその下にすわらせてもらい、どうなったか話すことにしよう……ふたりのこどもの働き口がみつかったようだよ」

それから彼はあの饒舌な老婆たちのひとりと一緒に郷士の館に入っていった。その女は聖パヨ修道院の修道女たちのように、チェリーの砂糖づけやマルメロ菓子を

つくることでたいへん有名であった。その間に、人々は警吏に引き立てられていく男を見ようと群れ集まった。アデガもまた近づいたが、その男を見て金色のまつげが震えた。両腕を縛られ引いていかれるその男は旅籠の息子だった。

### 第三章

古い城壁の下にいまなお残っているデアンの門から、夕方近くに老婆と羊飼いの少女とこどもが出てきた。老婆は歩きながらふたりに話していた。

「これでお前たちの奉公先はみつかった。あとは律義によく働くことが肝心だよ」

三人は人家のないところで夜になるのを恐れ、息を切らして歩いていく。すでに町から遠く離れ、ある道の四つ辻にきたとき、老婆は思案にくれて立ち止まる。

「なあ、アデガ！……ブランデソの館に寄っていったら、あたしたちは今日じゅうにサン・クロディオに着けないよ」

アデガは悲しそうにつぶやく。

「ついてきてもらえないならあたしひとりで行くわ……道はわかってるから。でも、奥方さまにはあたしの代わりに話してもらえたらうれしいんだけど」

老婆は同情して言う。

「それじゃはじめにこの子の奉公先へ行こう。そのあと月明かりで館にいこう、たいしたまわり道じゃないから」

山々の上で輝いているあの穏やかな太陽の下、村人たちが道を歩いている。遠くの青い霧のなかに、聖クロディオ教会の糸杉の夢想にふける黒い姿がほのかに見える。その樹冠はたそがれの金色の光を浴びている。羊の群れが村へと戻っていく。家々からたち昇るかすかな白い煙が、平和の挨拶のごとく光のなかに消えうせていく。境内の入口に腰をおろしていたひとりの盲人が施しものを乞い、乳白色のめのうのような目を上げる。

「どうか聖女ルチアさまが視力と健康をお守りくださいますように、皆さまがこの世で暮らしていけるように！……どうか神が皆さまにお与えくださいますように、他人へ施すものとご自身へのお恵みを！……健康と視力を、この世で暮らしていけるように！……道行くあまたのこころ正しき皆さま方、どうかこの哀れなものにお恵みを！……」

こう言って盲人は干からびた黄色っぽい掌を差し出す。老婆は羊飼いの少女を道に残し、孫の手をひいて近づいていき、悲しげにささやく。

「あたしたちも同じく哀れなものだよ！……あんたが手引きのこどもを探してるって聞いたんだけど……」

「その通りだよ。前の子は聖アマロへの巡礼のさいに頭を叩き割られてな。頭がおかしくなってしまった！」

「あたしゃエレクトゥスに聞いてきたんだよ」

「あいつには手引きはいらない！目あきよりもよく道を知ってるからな」

「あたしゃ孫を連れてきたんだ」

「よく来てくれた」

盲人は両腕を伸ばして手探りをする。

「ここにおいで、坊主」

老婆はこどもを押しやる。破れた軍用外套に身をくるんでいるその無愛想な男の前で、こどもは臆病でおとなしい子羊のように震えている。盲人の黄色っぽい物乞いの手がこどもの肩にかかり、その背中を探るように動き、さらに両足に沿って這う。

「背負い袋をかついで歩くのだが疲れはないかな？」

「平気だよ、俺そういうことには慣れてるから」

「これをいっぱいにするには何軒もまわらなくてはならない。お前、このあたりの村の道をよく知ってるかね？」

「わからなかったらひとに訊くよ」

「巡礼のさいにわしが歌をうたったら、お前も別のを歌うんだが。いいかね？」

「うん、覚えたなら」

「盲の手引きになるってことは、誰もが望む仕事だよ」

「うん、わかってる」

「お前がきてくれたんじゃ、司祭館までいこう。あそこは情け深いからな！この場所ではほんのわずかな施しももらえない」

盲人はしびれた体を起こし、こどもの肩に手をかける。こどもは長く伸びた道を悲しげな表情で眺める。さらに、夕暮れののどけさの中で微笑む湿った緑の平野、そこに点在する村々の農家と戸口のおどろ棚の下に見え隠れする遠くの水車小屋、そして青い山脈と峰々の雪を見渡す。道に沿ってひとりの若者が腰をかがめて草を刈っている。揺れるピンク色の乳房をもつ牛が、端綱を引きずりながらのんびりと草を食んでいる。若者や娘たちが道々歌をうたいながら村に戻っていく。白い煙がイチジクの樹間からたち昇っているようにみえる。盲人とこどもはゆっくりと遠ざかっていく。祖母はアデガに近づくと、溜め息をつき、涙をぬぐいながら言う。

「かわいそうに、まだ九つだというのに自分の食うパンをかせぐんだから！……やれやれ！……」

アデガは奇蹟の燃えるような息吹きが自分の顔にかかるのを感じ、こうささやく。

「あの盲のひとは天国の聖者さまで、どこに慈悲の心があるか調べ、あとで主イエスさまに報告するために世間を歩きまわってるんです」

老婆がそれに応える。

「主イエスさまは、どこにこころ正しきひとが隠れているか知るのに、調べたりする必要はないよ」

それからふたりはおし黙った。ブランデソの館にその日のうちに着こうと懸命に歩いていたので、息が切れていたからであった。

## 第四章

道は大女の乳房のように丸く等しいふたつの丘のあいだを通っていた。羊飼いの少女は立ち止まり、老婆に遠くの人影を指し示した。それは道の先の高いところで、たそがれのそよかぜに吹かれ神秘的に揺れる大ろうそくの灯りの下、何か熱心に読んでいるように思われた。老婆は長らく眺めていたが、やがてアデガにこう言って聞かせた。

「あの男はほかの場所でも見たことがある。読んでいる本の名前がどういうものか知ってるかい？ 聖シドリアンの書っていうんだ。あたしのおとっつあんのいとこもその本を持っていた！……」

信じやすいアデガは声をひそめて神秘的に言った。

「その本で隠された宝物が見つかるのね」

老婆は長い年月の経験から首を振って否定した。

「あたしのおとっつあんのそのいとは土地を売り、牛を売り、スープのお椀さえも売り払ったけど、何も見つからなかったよ」

「でもうんとたくさんの財宝を見つけたひとたちもいるわ……」

「あたしゃひとりも知らないよ。こどもの頃、このふたつの丘のあいだに王国七代を養うに足るお金があると聞いたことがある。でもそれは作り話さ」

アデガはスマイルの眸を信仰心で輝かせ、まるでむかし覚えた祈りを繰り返すようにささやいた。

「ふたつの岩山のあいだを通る道に、王国七代を養うに足る金がある。ある王の御代に羊たちが掘りかえし見つけだす日が訪れよう」

老婆は落胆して溜め息をついた。

「さっき作り話だって言っただろうに」

「作り話かもしれないわ、でもあたし山でサン・ペドロ・デ・セラのおじいさんから何度も何度も聞いたもの」

「聞いたことがすべて本当ならばいいのだけど！ 本を読んでいるあの男、あたしゃ知ってるよ。すこし前に山からやってきて、このあたりを歩きまわり、日が沈むとあの大きな本を読んでるんだ。恐水病にかかった犬のように爛々と目を光らせ、顔色ときたら蠟のように白い」

するとアデガが言った。

「あたしも知ってるわ。旅籠で何度も休んでいったから。あそこでいつだったか話してたわ、宝物の番をするアラブ人はこの時刻にだけ姿を現すから、聖別した大ろうそくの灯りで本に書いてある言葉を読まなければならないんだって」

とうもろこし畑が長々とざわめき、たそがれのそよかぜが起こり、ふたつ折りの書物の古びた紙片をかき乱した。大ろうそくの光がふたりの女の目の前で消えた。太陽はすでに沈み、夕暮れの風がざわめく緑のとうもろこし畑の上を、最後の歓喜のように渡っていった。灌漑用の水が泥のたまった水路を静かに流れていた。水は

穏やかで、透き通り、つつましやかだったので、人間のように魂があるかのようであった。聖グンディアン教会、聖クロディオ教会、聖女バヤ・デ・ブランデソ教会、聖ベリシモ・デ・セルティゴス教会のあの老鐘が、夕暮れののどけさの中にその音色を響かせていた。ナイチンゲールの歌が遠くからそれに唱和しているようであった。その鳥は、月が昇ると、戦士天使長の兜の飾冠の銀の羽飾りのように揺れる威圧的で優美な姿を、ある木の暗い樹冠上に現した。ふたりの女は早く着こうと躍起になり、息を切らしながら、たえず道を先へと歩きつづけていた。やっと老婆が立ち止まり、つぶやくように言った。

「もういくらもないよ、あんた！」

アデガが応えた。

「もういくらもない、そうよね、おばあさん！」

ふたりは黙々と歩きつづけた。道は濁った水たまりだらけで、そこに月が映っていた。銀色の光の下、みぎわで単調なソコをしわがれ声で歌っていたカエルが、足音が近づくと水に飛び込んだ。遠くでは、射眼のついた塔が、紋章の紋地の上におけるがごとく、明星のちらばる青い空にくっきりと際立っていた。ブランデソの館の塔であった。それは古い大きな庭園の奥にあった。庭園は夜のなかに花の香りをばらまいていた。鉄製の門扉のうしろでは、糸杉がその黒い樹冠を高々とのぞかせ、門のアーチの上部を飾る創立者の四つの紋章が、月明かりに照らし出されていた。館に着くと、アデガが小声で言った。

「この門前にきたときは、いつもかならず助けてくれました！」

老婆がそれに応えた。

「すごく情け深いお屋敷だからね！」

ふたりは尊敬の念を抱いて一緒に近づいていき、門扉越しに中を覗いた。

「誰も見あたらないね、あんた」

「たぶん、もう遅いからよ！」

「遅いからじゃないよ、開いてるんだから……台所に入ってみよう」

「犬がつないでなかったら？……」

「犬がいるのかい？」

「二匹いるわ、それからすごく獐猛なオオカミ犬も一匹」

このとき、ふたりは近づいてくる人影をみて、そばに来るのを待った。その男は茶色い外套にすっぽりとくるまっていたが、すぐに誰だかわかった。熱をおびた目がずきんの下で光り、大きめの服から出ている亡霊のような手には、羊皮紙でできた二つ折りの本が握りしめられていた。ひとりごとを言って門扉のところまでやってくると、魔女や小鬼の御祓いと、ひとり奇妙な相づちを打ちながら意味不明の典礼式の文句をつぶやいた。彼が中に入ろうとしたとき、老婆は賛美歌の口調で尋ねた。

「犬はつないであるかね？」

「門を閉めるまではけっして放さないよ」

まるで魂のぬけ殻であるかのように、彼の声は眠そうで間延びしていた。彼が門扉を押すと、それは長々とした唸り声をたてた。彼は相変わらずあの意味不明の典礼式の文句をぶつぶつ唱えながら、豪壮な庭園に入っていった。ふたりの女は前掛けで頭を蔽い、控えめな様子で影のように後から入っていった。

## 第五章

召使たちは館の広い台所に集まっている。ぶどう蔓が燃え、召使たちが腰かける長椅子と暖炉を蔽う黒いフードを、火の粉と煙が戯れながら上っていく。その石のフードの中には長い丸太が数本渡され、燻製用の肉が吊るしてあり、気前のよさと豊穡さを見せつけている。あの宝捜しの人影が胸に本をしっかりと抱きしめ、壁に沿ってすべり、カバラの呪文をつぶやきながら片隅に消える。彼の頭はおかしいと召使たちは思っている。かなり前にかつての執事の孫だと言って現れ、今はそこに引き取られている。館では万事がしきたりに従って行われるからである。後から入ってきた老婆と少女がつつましやかに言う。

「こんばんは！」

数人がそれに応えた。

「こんばんは！」

聖ヨハネ祭のころに熟するリンゴのような赤い頬をし、つややかな赤銅色の髪をし、牛乳のように白いうなじをした娘が、粗布のシャツを肘まで腕まくりし、立ってお椀にスープを盛りつけている。炎に顔を照りかがやかせ、ふたりの女のほうを振りむく。

「何かご用？」

老婆は寒さに震えながら火に近づく。

「この子をここで使ってもらえるか聞きにきたんだよ」

古参の召使がつぶやくように言う。

「もう十人にもなるんだぜ、ここで厄介になっているものは」

老婆はふたたび身震いし、腰をかがめて暖炉に近づいていく。

「ああ！……この火はまったくひとごちをつかせてくれるよ。あんた、どうしてそっちにいるんだい？」

アデガは伏目がちに答える。

「いいの、あたし寒くても平気だから」

赤ら顔の娘が振りかえり、同情して言う。

「さあ、スープを一杯おあがりよ」

アデガが小さな声で言う。

「ありがとう」

老婆は相変わらず体を震わせている。

「今日は一日中あったかいものは口にしなかったよ」

牛番の下僕がツゲのさじをスープに沈めると同時に、重々しく頷いて言う。

「貧乏人にはよくあることさ！」

老婆は溜め息をつく。

「貧乏人だけがわかることだよ、あんた！」

暖炉で燃えるぶどう蔓の炎と召使たちのその夕食には、どことなく族長的な趣がある。召使の多くは館の屋根の下で生まれていた。老婆と少女は湯気をたてるお椀を両手でかかえているが、かつて奥方の乳母であった白髪の女中頭が尋ねるあいだは、あえてそれに口をつけようとしない。

「誰があんたたちをここに寄こしたのかね？」

「エレクトゥスです」

「盲の？」

「そうです、盲の。お屋敷で家畜の世話をする娘が入り用で、それを探す役をおおせつかっているとやってたもんで……」

牛番の下僕がつぶやくように言う。

「あのいまましいエレクトゥスめが！」

女中頭が突然苛立たしそうに言う。

「あとで奥さまから褒美をもらおうという魂胆なのさ、また厄介者をひとりつけてきて！……」

ほかの召使たちは小声で愉快そうに繰り返す。

「うまい手をよく知ってるよ！」

「なんてずる賢いやつなんだ！」

「奥さまがやさしいお方だってこと知ってるんだ！」

老婆はスープを飲むことに決め、その場をとり繕おうとして機嫌よく言う。

「心配はご無用で。この子は食わせてもらうだけでいいんですから」

アデガがおずおずと言う。

「あたし、食べさせていただくだけのことはします」

女中頭は寛大で慈愛深い屋敷に誇りを覚え、胸を張って言う。

「ねえ、娘さんよ、ここではみんなお給金をいただいているんだよ。それに毎年着るものも一着支給される」

召使たちは頭を下げ、ツゲのさじでキャベツをすすりながら、館の曾祖父の時代からつづいているあの寛大なしきたりを口々に賞賛する。やがて、白髪の女中頭は鍵束を鳴らしながら立ち去り、暗い扉から姿を消すときに、ひとり言のようにこう言う。

「今夜はわら置き場で寝るがいい。明日になったら奥方さまがお決めになるから」

女中頭が去ると、赤ら顔の娘が羊飼いの少女に近づき、にこやかに尋ねる。

「名前なんていうの？」

「アデガ」

「じゃ、アデガ、何も心配いらなからね。あんたここにおいてもらえるから、あたしたちみんなと同じように。ここでは誰も閉め出したりしないわ」

このとき、むこうの台所の奥のほうから、宝捜しの男の熱にうかされたような敬虔な声が聞こえ、その人影がゆっくりと近づいてくる。

「娘さんよ、これほどなさけ深い家は世界じゅうどこにもない！……王宮にだってこのように気高いしきたりはないよ！……」

## 第五部

### 第一章

召使たちは台所で夜を徹していた。そこでは一晩じゅう火が燃えていた。オオカミ狩りが夜明けに行われることになっている。以前の狩りでの出来事を思い出しながら、年のいった老人たちは時々長椅子でまどろんでいる。誰かが台所の戸を叩く音がし、びっくりして目を覚ます。いつでも戸を開ける用意のできている赤ら顔の娘がかんぬきをはずす。すると、夜の挨拶をささやきながら、オオカミの獵師として名高い村の若者が入ってくる。片隅に獵銃をおき、暖炉のそばに腰をおろす。白髪的女中頭が現れ、ぶどうの新酒を一杯ふるまってやるように命じる。獵師は飲み干す前に、古めかしい文句を唱える。

「今日よりさき千年の長きにわたり、このようなありがたいものをお相伴できますように！」

赤ら顔の娘はアデガのそばに戻る。

「あたし、あんたのこと知ってるみたい。あんた、サン・クロディオのもんじゃない？」

「そう、あそこのもんよ、あそこにみんなのお墓があるの」

「あたしの村はほんの少し離れたところ……サン・クロディオにはおとっつあんの姉さんがふたり結婚して住んでいるんだけど、あたしたちはアンドラデのもんなの。あたしの名前はロサルバ。奥方さまが名づけ親よ」

アデガはそのスマイルの眸をあげ、つつましやかに微笑み敬虔に言う。

「ロサルバ！その名前をした聖女さまはどんなにか美しかったことでしょうね。まるで天国のお庭で摘んだ花みたいだわ！」

それから彼女は押し黙り、暖炉の黒いフードの下で大きくなったり小さくなったりしている炎を眺める。暖炉の反対側では、牛番の下僕が鎌を取りつける檜の棒を火にあぶって鍛えている。このような鎌を手にして狩りにいき、オオカミがねぐらにしているハリエニシダの茂みに犬とともに入りこむのである。台所の奥では別の召使が鎌を砥いでいる。刃が砥石の上を行き来するときにあがる、あの突き刺すような軋む音が神経を苛立たせる。アデガは長椅子の上で、眠気を誘う消え入りそうな話し声を子守唄にしてだんだんと寝入っていく。彼らは種まきや雨や兵役の話を

している。廊下に女中頭の咳と鍵束の音が響き、すぐに彼女が台所に顔を見せて尋ねる。

「何人集まったかね？」

急に会話がやむ。しかし、生気の風があつた睡魔にとらわれた頭の上をさっと吹きぬけたのか、彼らの目が生き生きとし、木靴が敷石とこすれる潮騒のような音が聞こえる。赤ら顔の娘が立ち上がり、数えはじめる。

「いち、に、さん……」

女中頭は暗い台所の奥で待っている。その間に彼女の情け深い目が羊飼いの少女にじっと注がれる。

「まあ！……心地よさそうに眠っているよ。火の中に落ちないように、気をつけておやり」

老婆はアデガの肩に手をかける。

「ねえ！……起きなさいよ、あんた！」

アデガは目を開けるが、ふたたび閉じる。女中頭がささやく。

「起こさないで……頭の下になにか入れておやり、そのほうが楽に休めるから」

老婆は前掛けをたたみ、片手で麦の穂色に日焼けした頭を持ちあげる。羊飼いの少女はふたたび目を開け、まぐらの柔らかい感触に溜め息をつく。老婆は女中頭のほうを振りむき、しおらしさと狡猾さの入り混じった笑みを浮かべる。

「親のないかわいそうな子なんですよ！」

「あんたの娘ではないのかい？」

「違いますよ……この世に身寄りはいないんです。あたしゃ気の毒に思っ  
て一緒についてきてやったんです。かわいそうにこの子は時々悪霊に憑かれるん  
です。埃にまみれ、足を血だらけにしてあちこちほつき歩いているのをみると、胸が  
痛みます。それはそれは気の毒で！」

「だったら、どうして聖女バヤ・デ・クリスタミルデにつれていけないのかね？」

「さっき言ったでしょう、この子の面倒をみってくれるひとはいないって……」

聖女の名前がでると、そのあとに長い熱烈なささやきが湧きあがり、それは聖女の奇蹟の名残のごとく暖炉のまわりに漂う。この世に聖女バヤ・デ・クリスタミルデほどの聖女はいない。その御堂を訪れるひとはすべて、天国のしずくを感じとる。聖女バヤ・デ・クリスタミルデはぶどうの収穫を保護し、狂犬の噛み傷を癒してくれる。しかしその最大の驚異は、その祭日に体に憑いた悪霊を祓うということである。ぶどう蔓の火のそばで夜を徹しているものたちの多くは、憑かれた女たちが翼をもつトカゲに姿を変えた悪霊を吐きだす様を見たことがあった。迷信の風が館の広い台所を吹きぬける。ぶどう蔓が暖炉の中で撥ねて、悪霊に憑かれたある女の話に伴奏をつけている。敬虔な恐怖にとらわれ、うつろな目でその話を語っているのはあの宝捜しの男である。外では、犬が寒さに毛を逆立たせ、月に向かって吠えている。ふたたび女中頭の鍵束の音が響く。扉のところから手で合図をする。赤

ら顔の娘が近づく。

「何かご用ですか？」

「何人いたかね？」

「二十人、まだもっと来ます」

「よろしい。酒倉におりて、アルネラの酒をもってきておくれ」

「どのくらい？」

「中くらいの革袋をもっておいで。持てなければ、誰かひとり連れていく方がいい……  
濟んだらよく閉めておくんだよ」

「心配いりません」

女中頭は鍵束を手渡すときに、鍵の一本を取り出す。

「これが開ける鍵だよ」

「わかっています」

白髪的女中頭が去ると、赤ら顔の娘は酒倉におりていこうとランプに火をつける。暖炉の大きなフードの中でつむじ風がうなり声をたてている。炎は伸びたり縮んだりし、みんなの顔を鮮やかに照らしている。時々戸を叩く音がし、獵犬の綱を引き、棒を肩にかついだ獵師が暗がりのなかに現れる。遠くの者たちは夜明け近くになって到着する。戸を開けてやると、物寂しい明るさが四角形の広い台所に入りこむ。そこではぶどう蔓の炎が一晚じゅう燃えつづけたあと、大きな残り火となって消えかけている。灰だらけの暖炉では残り火の赤い眸がまばたきし、黒いフードの中では河口のように風がうなり声をたてている。

## 第二章

アデガは奥方の召使たちのなかに加えられた。ちょうどその日に村の娘たちがやってきた。彼女たちは毎年気前のいいブランデソの館で亜麻を打ち砕いていた。歌いながら作業をはじめ、歌いながら作業をおえた。アデガはその手伝いをした。彼女たちはテラスで亜麻を打ち砕いていた。その歌声をバルコニーの奥で女主人が聞いていた。彼女はユソウボク製の香りのいい上質の糸巻き棒で糸を紡いでいた。奥方は田舎の女領主たちすべてにみられるように亜麻布が好きで、芳香を放つマルメロの実とリンゴと一緒にそれをクルミ材の大櫃に保管していた。彼女は冬のあいだずっと紡ぎ、糸束を百かせ揃えていた。それを赤ら顔の娘と白髪的女中頭が、がらんとした大広間の奥で何日も費やして糸巻きに巻き取った。奥方はそれではかに見られないくらいすばらしい一枚ものの布地を織り上げるつもりだった。亜麻砕きの娘たちは日雇いで働いていた。夕暮れに初日の作業がおわると、彼女たちは庭園に散らばり、大声をたててあたりを賑わした。アデガもみんなと一緒に庭園に下りていった。噴水のそばに腰をおろし、寂しそうな笑みを浮かべて彼女たちの歌や遊びに見入っていた。彼女たちが去っていくのを見て、幸福感につつまれた。アデガはきらめくふたつの溜め息のような眸で空を見上げた。真っ白い喉元と金色の眉をした少

女はふたたび果てしない夢想のなかで生きていた。豪壮な庭園の老樹の陰に腰をおろし、聖性と芳香にみちた短い青い午後が暮れなすむのを見て溜め息をついていた。彼女は奇蹟の燃えるような息吹きが顔にかかるのを感じていた。そして奇蹟が起こった。ミルテの迷路のなかをこっそりと流れる噴水の水を飲もうと身をかがめたとき、彼女のスマレの眸は、夕日が揺らめいている水面に幼児の笑顔が現れるのを見た。それは聖なる前兆であった。アデガは乳房から乳が流れ出るのを感じ、主イエス・キリストの御子の挨拶の言葉を聞いた。それから彼女の目は見えなくなった。噴水のそばで気をうしなった彼女に聞こえたのは、空を飛ぶ天使の翼の音だけであった。長い時間が過ぎたあと我に返り、草の上にすわりこんだまま御子出現の出来事を思い起こし、驚くとともに自らの幸運に涙した。天の高みに歌いながら消えていく小鳥のように、寂寥とした庭園の中で自分の魂が飛びまわる思いがした。

バルコニーのガラス窓のうしろでは、たそがれの最後の光のなかで、まだ奥方が糸を紡いでいた。うす暗がり糸を紡ぐ背をかがめたその人影は神秘的に満ちていた。彼女のまわりのあらゆるものが予言的意味合いを帯びているように思われた。人生の糸の先で彼女の昔日が揺れているように、彼女の指がよじる糸の先ではユソウボクの錘が揺れていた。館の女領主は別の時代、別の家族的で寛容な感覚、さらにこの世の関心事との別の関係を喚起するお方であった。すでに月が昇っており、聖体のように白く慰撫するようなその光が庭園じゅうに降り注いでいた。亜麻碎きの娘たちの声が噴水や木立の音とみごとに調和していた。それはまるで森羅万象の大いなる規範の下における被創造物すべての祈りのようであった。

### 第三章

アデガが夢想の白い霧のなかで生きているかのように放心しているのを見て、召使たちは彼女に幻視したものを話すように頼んだ。その話を注意深く聞いた彼らは、ある者たちは信じられないといった様子で、また別の者たちは迷信深そうに顔を見あわせていた。アデガはうつろな目をし、唇を震わせ、熱烈な言葉で話していた。その顔には聖油のように神秘的な幸福感がばらまかれていた。恩寵の波に顔をほてらせ、まるで炎が暖炉のおどう蔓に口づけるように、音をたてる情熱的な口づけで地面に口づけていた。時々彼女のスマレの眸が金色のまつげの中で不思議な光を放ちきらめいていた。白髪的女中頭はその眸に狂気を見たと思い、十字を切り、ほかの召使たちに言った。

「悪霊に憑かれていますよ！」

アデガはそれを聞いて叫んだ。

「あなたは年をとっている、それでもあたしの子は見られるわ……その子が誰かわかるわ、額に光輪があるから。主イエス・キリストさまの御子なのよ！」

女中頭はやさしい物知りの祖母のように両腕をあげて言った。

「いいかね、よく考えるんだ、お前は聖母マリアさまに自分をなぞらえようとして

るんだよ！」

アデガは熱情に顔を輝かせ、つつましく溜め息をついた。

「そんなこと起こりっこないわ！……あたしにはよくわかっているの、あたしは哀れな羊番だけど、聖母マリアさまはすごくお美しい高貴なお方だってことが。でもあたし、さっき言ったように、噴水の水に赤ちゃんの顔が映るを見たの、そのとき体の中であたしに話しかけたの……いまでもその声が聞こえるわ、あたしを呼んでるのが、手じゃなく五月のバラみたいになっちゃう赤い足のかかとでそっと叩いて！……」

迷信深そうにささやく声が入ってきた。

「本当に悪霊に憑かれてるんだ！」

すると白髪の女中頭が鍵束を鳴らしながら言った。

「悪魔のしわざだよ、ペテンを使ってこの子の中に入りこみ、取りつき、あたしたちみんなに罪を犯させようと、この子の口を通して話しているんだ」

暖炉の大きなフードの下、火のそばで交わされるその会話の妖しいざわめきは、うなり声のように館の中を走りぬけた。その音を運んでいるのは、廊下の奥で扉を叩きまわっている夜の風で、時計が幻想的な時を刻んでいるがらんとした広間を物音で満たしていた。

奥方は知らせを受けると、少女が悪霊に憑かれているかはっきりさせるために司祭を呼ぶように命じた。司祭は重々しい聖職者の足どりで床を揺らしながらやってきた。二匹のグレーハウンドの老犬が彼の護衛をしていた。アデガは呼び出され、尋問を受けた。司祭は犬の首をなでながら考えこんでいた。ついにその少女が悪霊に憑かれているという裁定を下した。奥方は敬虔に十字を切り、扉のところに集まっていた召使たちは、静かなざわめきをたてながらその動作をまねた。やがて司祭はがっしりした金縁の眼鏡をしっかりとかけ、馴れた手つきで祈祷書をめくり、召使のひとりが銀の燭台で支える、しずくを垂らすろうそくの灯りの下で、悪魔祓いの祈祷をはじめた。

アデガはひざまずいた。そのラテン語の祈祷は彼女に宗教的な畏怖の念を吹きこんだ。彼女は泣きながら聞き、泣きながらその夜の集いを過ごした。みんなの寝室がある塔に登るために女中頭がランプに火を灯すと、黙ってそのあとにしたがった。アデガは震えながらベッドに入り、死んだ両親のことを思い出した。暗がりの中で目がきらめくのを見、悪魔の目ではないかと恐れ、十字を切った。アデガは恐怖にかられ、黙想し祈ろうとした。だが一瞬消えたかにみえたその目はふたたび彼女の目の上で光っていた。その目を間近に見て、暗がりの中で両腕を広げ払いのけようとした。アデガは身を守ろうと苦悶のなかで叫んだ。

「あっちへ行け！あっちへ行け！……」

女中頭がかけつけた。アデガはベッドの上で体を起こし、影と戦っていた。

「あそこに悪霊がいるから見て！……あの笑い方を見て！あたしと寝ようと思って、

暗闇のなかやってきたのよ。誰にもわかりっこないわ！毛むくじらの手があたしの体を這いずりまわり、あたしのおっぱいを握りしめたの。赤ん坊のようにそこに口をつけようとしてたのよ。ああ！どこから顔を出してるか見て！……」

アデガはうつろな目をし、唇を蒼白にして身もだえしていた。肌もあらわに全裸でベッドの上にあった。肩のまわりで乱れ揺れているブロンドの髪は不吉な炎のようにみえた。彼女の叫び声は塔に巣をつくる鳥たちを目覚めさせていた。

「ああ！……悪魔がどこから顔を出してるか見て！あの笑い方を見て！あの黒い口であたしのおっぱいをしゃぶろうとしてたのよ！……それはお前のものじゃない、よこしまな悪魔よ、それは主イエス・キリストさまの御子のもの。あっちへ行け、悪魔！あっちへ行け！」

女中頭もびくびくしながら繰り返した。

「永久に立ち去るがいい！」

曙光が塔のガラス窓で震えはじめると、悪魔はコウモリの翼を羽ばたかせ逃げていった。奥方はことの次第を知ると、少女を聖女バヤ・デ・クリスタミルデへ巡礼に行かせることにした。女中頭と下僕がひとり一緒にいくことになった。

#### 第四章

聖女バヤ・デ・クリスタミルデは山のむこう側の、海が轟音をたてる砂原にある。その祭日には毎年多くの信者が訪れる。御堂は丘の上に建ち、鎖を引いて鳴らす大鈴がある。屋根はスレートでできているが、聖女がお望みになれば黄金で葺くことも可能であろう。

アデガと女中頭と下僕は真夜中に着くように夕方出立する。悪霊祓いのミサは真夜中におこなわれることになっている。三人はほかの道を通って行く巡礼者たちの歌声を聞きながら黙々と歩く。道すがらいざって歩く乞食に出会う。すでに日は沈み、二頭の赤牛が池の縁で水を飲んでいる。遠くでわら置き場の番をしている犬の吠え声が起る。月が昇り、フクロウが栗林に隠れて歌っている。

山道にさしかかる頃にはすっかり暗くなり、下僕はオオカミをひるませようと棒先につるしたカンテラに火を灯す。前を乞食たちの一団が行く。彼らの嘲るような不信心な声が聞こえてくる。彼らは道に沿って毛虫のように列をなして体を引きずっている。盲もいれば、いざりも癩病みもいる。彼らはおしなべて人様のパンを食い、恨みを晴らそうとそのシラミを払い落としたり、強欲な金持ちの戸口にその膿をなすりつけたりして世間を放浪している。ある女は全身癩に冒された幼児に乳房をふくませ、またある女は中風病みの乗った手押し車を押している。鞍ずれだらけの年老いたロバの鞍袋には、奇形児がふたり入っている。その頭は異常に大きく、手には水かきがついている。アデガはサン・クロディオの盲人と手引きの少年を見つける。少年はいたずらっぽく笑いかける。

「お館にいるの、アデガ？」

「そうよ。で、あんたは、袋をかついで歩きまわる暮らしはどう？」

「悪くはないよ」

「で、おばあさんは？」

「同じように物乞いをしてるよ」

山を下ると、道はきしむ粗い砂でできた広々とした荒地に変わる。波は砂州で粉々に砕け、時々巨大な波が、波が引き乾いている異様な大岩の背を蔽っている。海水は轟音をたてふたたび引いていき、はるか沖合で白い波頭をつけた黒い黙示録風の頭をふたたびもたげる。満ち潮にはこの世の力強い神秘的なリズムが内蔵されている。乞食の一団は砂原に沿って休息する。御堂のある丘に登るとき、悪魔憑きの女たちは甲高い叫び声を発し、悪態をつく口からは泡を吹きだしている。女たちを導く敬虔な村人たちは彼女たちを引きずっていかなければならない。雲に蔽われた月のない空の下、カモメが鳴いている。夜の十二時になり、ミサがはじまる。悪魔憑きの女たちは身をよじらせて叫ぶ。

「タムシにかかった聖女さま、修道士の目ん玉くりぬいて！」

女たちは髪を振り乱し、目を大きく見開いて、祭壇のほうに行こうと躍起になっている。

たくましい村人でも彼女たちを抑えるには骨が折れる。女たちは胴衣を引き裂き、肩と胸の蒼白い肌をあらわにして、かすれた声で喘いでいる。指には髪の毛束がからみついている。ミサのあいだ冒瀆的な叫び声は止むことがない。

「聖女バヤさま、あんたには夜這いにくる狂犬がいる！」

アデガは女中頭と下僕のあいだにひざまずき、恐怖にとらわれ祈っている。ミサがおわると、悪霊に憑かれた女たちはみんな衣服を剥ぎ取られ、白い布にくるまれ海へ導かれる。アデガは恥ずかしがって泣くが、女中頭の決めたことすべてにつつましく従っている。女たちは波を前にすると、悲鳴をあげ、砂に足を埋めて抵抗する。体を蔽う布が落ち、蒼白い裸身が熱っぽく悲しい伝説上の大罪のごとく浮かびあがる。泡に縁どりされた黒い波が女たちを飲み込もうと身を起こし、浜辺をのぼってきて、あの髪の乱れた頭とあの震える肩に落ちかかる。罪を犯した蒼白な肉体は震え、悪態をつく口は塩からい海水を吐きだしている。波が引くと、乾いた岩があとに残り、はるか沖合では陰にこもった轟音をたてる波がふたたび頭をもたげる。その波の打ち寄せは聖者に対する悪魔の誘惑のようである。御堂の上ではカモメが鳴きながら飛び、鎖をつかんだこどもが大鈴を鳴らしている。聖女バヤが行列の奥に乗ってでてくる。金糸の刺繍をほどこしたマント、王妃の冠、ムロス製の腕輪が星影の下で輝いている。司祭と侍祭童がラテン語の祈りを唱えると、悪魔憑きの女たちは波の泡の中で冒瀆的な叫び声を発する。

「タムシにかかった聖女さま！」

「でか尻の聖女さま！」

「さかりのついた聖女さま！」

「こどもを孕んだ聖女さま！」

村人たちはひざまずき、波の数をかぞえる。それぞれの女が悪霊から解き放たれ地獄の暗い牢獄からその魂を救い出すには、七つの波を浴びなければならない。それはこの世の大罪のごとく七つである！

### 第五章

羊飼いの少女と女中頭と下僕はブランデソの館への帰途についた。まだ睡眠中のここかしこの村々で雄鶏のラッパが聞こえ、山道の馨しい暗がりのなかで、巡礼者たちは歌い、悪魔憑きの女たちは叫んでいた。

「さかりのついた聖女さま！」

「でかっ尻の聖女さま！」

「こどもを孕んだ聖女さま！」

夜が明けはじめ、敬虔で幸せな田園生活の挨拶のように、風が雑木林や栗林に老鐘の音を運んだ。その音は朝露や牧場の香りを浴びているように思われた。背後には海が横たわっており、はるか沖合は黒々とし荒れ模様で、浜辺は白く泡立っていた。夜明けの輝かしさのなかで、その轟きわたる凄まじい音は冒瀆的な感じがした。谷間にはうす靄がただよい、栗林でカッコウが鳴いていた。下僕が雑木林のほうを向いて、からかうように訊いた。

「カッコウ王さんよ、俺があと何年生きられるか教えておくれ！」

鳥は聞き耳をたてているかのように黙りこんだが、やがて茂みの中から声を発した。村人はそれを数えた。

「ひとつ、ふたつ、みつつ……あんまり生きられねえじゃないか！間違ったんじゃねえか、カッコウ王さんよ！」

鳥はふたたび黙りこんだ。しかし長い沈黙のあと繰り返し何度も鳴いた。村人が話しかけた。

「ほら、さっきは間違っていたらう！……」

こうして栗林の中を通りぬけていくあいだ彼はカッコウと話しつづけた。アデガは溜め息をつきながら歩いていた。彼女のスマイルの眸は野の花のように涙のしずくで蔽われ、そこにあたって震えている朝の光は祈りのようであった。女中頭は彼女が放心した様子なのをみて、下僕の耳元でささやくように言った。

「あんた、気がついたかね？」

下僕は何のことかわからず、目を見開いた。女中頭はさらに謎めいた口調で言った。

「あの子を海からひき出したとき、何にも気がつかなかったかい？本当のところ、ひとの悪口言って地獄におちるのはいやだけど、あたしにはあの子が身ごもってるようにみえたのだがね……」

こう言ってから彼女は、信者らしい危惧の念から、齒のぬけた口の上で十字を切っ

た。谷間では、夜中に月明かりの下で魔女や小鬼の飛ぶさまを眺めているあれらの老鐘が、田舎の洗礼式のような賑やかな音をたて鳴りつづいていた。日中は太陽の光の下で天国の栄光をたたえ歌っている老鐘よ！聖ベリシモとセルティゴスの鐘よ！聖グンディアンとブランデソの鐘よ！ゴンドマールとレストロベの鐘よ！……

完